
満月の消えた世界

優弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

満月の消えた世界

【Nコード】

N5281Y

【作者名】

優弥

【あらすじ】

学園都市、それは存在するはずのない物、世界に何を望むのか？
さあ語り部達よ話を聞かせてくれ…
君達の語る世界を…

プロローグ

戦場…それは全てを賭けて戦う場所、その戦場に大人子供は関係ない、たとえそれが非道の道であつたとしても…

全てを切り終えて、少年は小さく溜め息を吐く、その理由はただ一つ…つまらない、人を切る感触も、悲鳴も、命乞いも、全てつまらないと感じている。

戦うことには慣れている、剣とを切ることも慣れてしまった、何もかもが薄れて虚ろになり、やがて少年は世界に絶望した。

親の顔さえ知らない自分に何が有るのか？

その答えを知るのはまだ先の話で有る…

第一話 平和な日常（前書き）

物語の始まり、キャラクターの容姿はまた今度紹介します

第一話 平和な日常

その日はいつもにも増してひどい夢を見た一真、そして目覚ましの音で起床した。

「…またあの悪夢か…ここ数年この夢しか見て無いな…」

そう言いながら額の汗を拭う一真、

「…ここに来てもう三年か…何も変わって無いな…ふっ、こんな
姿師匠が見たら殺されそうだな」

そう言いながらベッドから起き上がり、着替えようとした時、
一真の部屋にノック音が鳴り響いた。

「一真兄さん、起きてる？」

少女の声が聞こえると一真が…

「ああ…起きてるよ優香、すぐに下に降りるから待って居てくれ
…」

すると優香は返事をした後に階段を降りて行った、

「…さて、着替えも済ましたし、そろそろ降りるか…」

そう言いながら、部屋を出ようとした一真がふと手を止めた、

「…メール？誰からだ？」

そのメールの内容を見た瞬間、一真は驚いた、

「…何なんだよ、これ…何で俺の夢の事を知ってんだよ…気持ち悪奴が居たもんだ…」

そう言いながらそのメールを消す一真、それから下に降りた一真の見た光景はいつものものだった。

「あ…おはようございます、一真さん」

そう言って丁寧な朝の挨拶をする少女は、透き通るかの如く白い美しい肌をしている、

「おはよう美夜、相変わらず朝に弱い見たいだな…」

そう言いながらも、何処か心配そうな表情の一真、

「はい…少しキツいかも知れないですが…でも、大丈夫ですよ」

そう言いながらも作り笑いを浮かべる美夜、

「本当にか？俺で良ければ力になるぞ、…とはいえ、美夜には方術は効果ないし…」

そうブツブツ言いながら考え込む一真、それを見た優香が…

「大丈夫だよ、美夜さんは強いから…」

それに便乗する様に美夜が…

「そうですね、大丈夫です、ただ…吸血鬼の性質ですから…仕方無いんです…ですから…心配しないで下さい」

そう言ったところで一真は納得した様子である、それから朝食を食べて居ると優香が…

「あ…そう言えば、兄さん宛てに手紙が届いてたよ」

その手紙を受け取った一真は眉をひそめた、

「何故にこのメールの御時世に手紙何だ？」

そう言われて確かに謎に思う三人、取り合えず手紙を開けて読み上げるところが少しずれて居る一真である。

「え〜と、拝啓 一真様、元気にしているか？」

毎日トレーニングを怠って無いだろな？

聞きたい事は沢山有るが…最近変わった事は無かったか？有ったら連絡を入れなさい…だとさ」

そして、手紙を封筒に居れてその場に置いて立ち上がった一真、そして、何かを考え込む体制を取った、

「…（分からん、何で師匠までこの事を知ってるんだ？）」

そう考え込む一真、その姿を見た美夜が凄く心配そうな表情を浮かべて居る、

「あの…大丈夫ですか？ 一真さん…」

そう言いながら今にも泣き出しそうな顔をする美夜、それを見た一真が…

「（何故に泣きそうな顔をするんだ？）…大丈夫だ、ただ考え事をしてただけだ…」

と言いながら美夜の頭を撫でてやる一真、すると…

「か、一真さん…恥ずかしいです…」

そう言われてすぐに頭から手を放して玄関に向かう一真、

「…そろそろ出ないと遅刻するぜ」

そう言われて二人も玄関に向かったのであった、しかし…

「…まずいな、さっきのは空耳かと思って居たが…」

そう言いながら玄関の扉を開けた瞬間…

「行け！！晃平！！」

広秋により一真に向かって投げらる晃平、しかし、冷静に玄関を閉める一真、もちろんドアノブで頭を打つてのたうち回る晃平、そして…

「…こんな暑苦しい日に何が悲しくて野郎に抱き付かれにやあならんのだ？」

ああん？」

少しキレ気味の一真がのたうち回る晃平を踏み付けながら広秋を睨み付ける、

「ははっ、済まない、軽い冗談だよ…」

ようやく一真の足から抜け出した晃平が立ち上がった。

「お前は俺を殺す気か！！！！」

叫びながら一真に向かって殴りかかる晃平、しかし…

「…はあ、仕方ない、…晃平、お前が悪いんだからな…」

そう言いながら何かの構えを取る一真、そして…

「こくしんりゆきいしんしょう…克心流翠震昇」

説明しよう、翠震昇とは、相手の攻撃を受け流し、捌きつつ手の甲で相手の額に軽い振動を与えて、相手をしばらく気絶させる技である。

翠震昇をモロに喰った晃平、その場に居た誰もが逝ったと思つて瞬間…

「…この野郎、俺を殺す気か！！！！！！」

そう、翠震昇を喰ったにも関わらず、立ち上がったのである。

「そんな馬鹿な…遂に晃平にこの技が効かなくなったなんて…今

まで約2528回も決まっていたのに…仕方ない、次の技に…」

そんなそこはかとなりく危険な発言をする一真、一方その頃学校では…

「……………」

此処は校舎裏に有る弓道場、そこで一人の少女が競技用の弓では無い、明らかに短い弓を使つて的に向かい矢を放つて居る、しかし、明らかに矢が的まで行くのに起動がおかしい、

「…まだまだね…」

そう言いながら的を眺める少女、そこへもう一人少女が出て来た、

「おはよう、朝から頑張つてるわね、詩乃^{しの}」

そう言つて肩までしかない髪をなびかせながらやつて来たのは、眼鏡をかけた少女である、

「弓矢何てロータルな武器を使わないで、ボクみたいに拳銃にすれば良いじゃあ無いか…」

そう言いながら鞆から二丁の拳銃を取り出す少女、ちなみに形状は、44口径マグナムとグロック26アドヴァンスである。

「…あのさ、楓^{かえで}、銃刀法^{てうとうほう}って知ってる？」

そう言われて不思議そうな顔をする楓、そして…

「じゅつとつぼつ？何さそれ？
何かの小説の名前？」

そう言われて最早溜め息しか出て来ない、（普通は銃刀法を知ってるだろ）とツツコミたい衝動に駆られる詩乃、しかし…

「…もう良いよ、早くその物騒な物を直しなさい」

そう言いながら自分も弓矢を袋に入れる詩乃、そして…

「…取り合えず教室に行こうか…」

そう言いながら校舎に向かって歩き出す詩乃、それを追いかける形で移動を開始する楓、一方その頃一真達は…

「死にさらせ！！！！晃平！！！！」

そう、広秋によりさらに壁に投げ付けられて居る、ちなみに一真は無言で、そして鮮やかに突っ込んで来た晃平をかわした結果である、

「…どう言つつもりだ？」

そう言いながら手の平を鳴す一真、それを見た広秋が…

「我無実、我無実なりよ！！！！」

そう言いながら逃げの体制に入る広秋、しかし…

「逃がさん…」

「な…何だ、今の縮地しゅくちっぷりは！！！！」

そうツツコミを入れる晃平、そして…

「…死んで償え、克心流　乱れ桜」

(説明しよう、乱れ桜とは、右に太刀を左に小太刀を構えた状態で、右の太刀は桜が散る様に緩やかに、左の小太刀は豪雨の様に素早い斬撃を放つ奥義である、)

見事な縮地を見せると同時に、二本とも峰にし、小太刀の方は逆手持ちにした状態で乱れ桜を放った一真、それを思いつ切り喰って吹き飛ばされた広秋、そして…

「ぐふっ…やりやがるな…おい」

そう言いながらくたばる広秋、その後、彼の身柄を晃平により搬送されたとの事だそうだ…

それから数分後、一真達は学校に到着した、

「…あら、一真達じゃん、おはよう」

そう言いながら話しかけて来たのは、楓である、

「おはよう楓、相変わらず朝から元気だな、おい…」

そう言われて膨れっ面になる楓、

そう言いながらも少し楽しそうな楓、

「…やっぱり高いよ、テンション、朝からはな…」

軽く流そうとした一真、しかし…

「あゝ一真が無視したゝ良いもん、良いもん、撃ち殺すから良いもん、」

そう言いながら双銃を乱射し始める楓、それをいつもの光景だと言わんばかりに無視する広秋と一真、しかし乱射して居る為、無視出来ない状況に有るのは確かだ、すると美夜が…

「…走って逃げましょう、優香」

そう言いながら走り出す二人、しかし、残された一真、広秋、晃平の運命はどうなったのか、今から説明をします…まずは一真から…

飛び交う弾丸の中、太刀を構える一真、そして…

「…克心流 かいてんそうはじん 回転双羽陣」

(説明しよう、回転双羽陣とは、その名の通り、太刀を回転しながら相手の攻撃を防ぐと言う、奇妙な技である)

回転双羽陣の効力で何とか弾丸を防ぎながら移動して行く一真、実に奇妙な光景である、一方その陣広秋は…

「…さすがに弾丸を受けたら死ぬな…仕方ない、アレを使うか…」

そう言いながら、何の構えも取らない広秋、しかし…

「…行くぜ、スパイラル クロス」

(説明しよう、スパイラル クロスとは、広秋が能力を習得したさいに手に入れた二本の双剣…であり、実は関節剣でもある武器である、彼の能力発動と同時に出て来るのである、ちなみに、彼の属性は水と風なので封印になります)

一瞬にして現れた双剣をそのままに突っ込んで行く広秋、そして…

「…喰え、(螺旋の裁き)」

双剣は一瞬にして関節剣へと変わり、そして、その関節剣による斬撃を高速で繰り出すこの技、能力者以外は使う事が出来ない荒技である、そしてそのまま弾丸を切れく広秋で有った、そして、最後の晃平は…

「わ…いつにも増して激しいな…おい」

そう言いながら懐から何かの紙…いわゆる護符を取り出す晃平、そして…

「守護の力よ我に集え…しんれいけつかい神霊結界」

(説明しよう、神霊結界とは、回りに存在する靈力を特殊な護符により、一定時間バリアーの役目をする技である)

神霊結界により弾丸を遮断したのは良いが、あと数分しか持たない状況に追い込まれた晃平、すると…

「…楓、ごめん…」

そう、たまたまそこを通りかかって詩乃の手により気絶させられて居た、

「…岡本君、もう結界を解いても良いよ…」

そう言われて瞬間的に結界を解く晃平、すると、先程まで暴れて居た広秋と一真が集合した、

「…終わった様だな…」

そう言いながら太刀を鞘に納める一真、

「…何とか今日の暴走は治まったか…全く、毎朝こうだと身が持たんな…」

愚痴りながら武器を一瞬で直す広秋、

「確かに、てか、一真が妥協すれば済む話かと…」

その瞬間に睨み付けられる晃平、

「…そんなに俺をノイローゼorうつ病にしたいか、己は…?」

そう言いながら太刀を晃平に突き付ける一真、すると…

「…ごめんなさい、命だけは勘弁を…」

そう言って命乞いをする晃平、しかし…

「…問答無用…」

そう言いながら走り出す一真、それに気付いて逃げ出す晃平、し
かし…

「逃がしはしない… 克心流 空刃絶翔残」

（説明しよう、空刃絶翔残とは、一瞬にして真空波を発生させて相
手を牽制し、その後に関手を切り伏せる技である）

空刃絶翔残により、打ちのめされた晃平、それを見て一真が…

「…またつまらん奴を殺ってしまった…」

そう言いながら剣を鞘に納める一真、ちなみに晃平は、一真の手
により保健室に搬送されたのは言うまでも無い、こうして一真達の
いつもの（？）日常は始まったのであった…

第1話 完

第一話 平和な日常（後書き）

如何でしたか？

え？

つまらない？

作者には文才がないのだよ

第二話 時の流れと今（前書き）

連続…とまでは行かないですが投稿します。

第二話 時の流れと今

教室についた一真に最初に話しかけて来たのは、やはり美夜と優香であった、

「大丈夫ですか、一真さん…随分と疲れてる見たいですけど…」

心配そうに一真を見る美夜、それに気付いた一真は…

「…大丈夫だ、少し疲れただけだ…」

そう言いながらまたもや美夜の頭を撫でる一真、それを受けて顔を赤くする美夜、しかし、場所が悪かったのか、男達の殺気（嫉妬の念）を感じて席を立つ一真、

「…トイレに行つて来る…」

そう言い残して教室を後にする一真、それに続いて出て行く十人の男達…それから数分後…

「…彼らはどうしたんの？兄さん…」

そう聞かれてしかめっ面をする一真、そして…

「…多分屋上で寝てるんじゃないか？」

屋上で何があったか大体予想が着く美夜と優香、我ながら酷い事をしたと言う顔の二人、ま、気にするなと言わんばかりの一真が凄いい…そんなこんなで昼休みになつて居た、

「…さて、飯にするか…」

そう言いながら弁当を持って教室を出ようとした一真を美夜が止めた、

「一真さん、明日の事なんですけど…」

全部話す前に美夜を連れて屋上に向かう一真、ちなみに、付けて行くこうとして居た奴等は優香により排除されたとき、そして数分後、屋上では、晃平、広秋、楓、詩乃がすでに場所取りを済ませて居た、

「あ…やっと来た、あれ？優香は？」

そう聞かれて少し迷った後一真が、

「…いつもの奴等の排除に向かった…」

そう言われて何となく理解出来た様で納得する広秋達、そんな事を話して居ると…

「ふう…今度から気を付けてって再三言ったのに…」

そう愚痴りながら手をハンカチで拭いて居るのを見て尋ねる広秋、

「…ところで、何で手を拭いてるんだ？」

それを聞かれて少し怒った顔をする優香、

「…そんなに見たいんですか？血で汚れた私の手を…」

それを聞いた瞬間から指を鳴す優香、それを見ておびえる一真と美夜以外のメンバー、

「一つ思ったが、怖くないのか？二人は…」

そう聞かれて（いつもの事だ）と言う一真、しかし、このままで優香の怒りが爆発しそうなので一真が…

「…いつもすまないな、今度何かおごってやるから許してくれ…」

そう言われて渋々納得する優香、そして…

「それじゃ…明日の帰りに緑凜堂（りょうどう）のスイーツパフェをおごって貰います」

そう言ながら笑顔になる優香、それを見て安心した一真達、それから数分後、話題は明日の事になって居た、

「…でよ、明日の事なんだが…どうするよ？」

そう、明日から夏休みを迎える一真達、なので何をするかを決めようとして居るのである、

「…その件は、隆司が来てから決めようと言っただろうが」

その時ある事に気付いた一真が立ち上がった、

「どうしたんだよ？一真…」

「…盗み聞きしている奴が居る…」

そう言いながら扉の方へ歩いて行く一真、その途端、扉の向こう側から数人が走り出す音が聞こえて居る、しかし、その音は途中で止んだ、

「やれやれ…いつからこの学校は屋上の生徒の話盗み聞きする輩が居るとは…」

そう言い終えた瞬間、二人の生徒が吹き飛んで来た、それを受けとらず受け流した、

「いつも思うが…むやみやたらに人を蹴り飛ばすのは止めるよな…隆司」

「すまん、つい昔の癖でな…」

そう言いながら残りの奴を放り投げた、

「もう良い…うんで、明日はどうするよ？」

「そつだな…海と山が定番だが…何せ学園都市からは出られないからな…」

会議を開き始める一真達、しかし、中々決まらない様子で…

「そつ言えば気になってたんだが…二人はどうして知り合ったんだ？」

「それはな…」

聞かれた瞬間から少し話辛そうな一真、それを見て居た隆司が…

「俺と一真と楓は、同じ孤児院の出身なんだ…」

「うそ…」

「本当だ…」

衝撃的な事を伝えた隆司、さらに話を続ける、

「…俺達はな、二歳で捨てられて、五歳までは施設で育てられたんだ…」

「…そして、五歳のある日、ある組織に入って居た師匠に連れられて、俺と隆司は京都の田舎へ、楓も途中まで一緒に居たんだが…違う人に連れられて、違う場所へ移されたんだ…」

衝撃的な人生を送って居た事が判明した一真と隆司と楓、そして…

「師匠の元で五年間修行した俺と隆司は、すぐに…戦場に連れて行かれた…」

それから五年は地獄だったと言う一真と隆司、楓は何も言わなかった…

「そんな事が有ったんだ…しかし、彩井と古川とはどうして知り合っただんだ？」

「ああ…それはだな、今から八年前、組織内の研究所で優香が美夜を殺そうとしていたところを俺が止めたんだ…」

そう言われて驚いた表情をする広秋、そして…

「…嘘だろ、あんなに仲良いのに…」

「今だからこそ仲が良いが、組織に居た頃はひどかったからな…」

そう聞いてこれ以上の散策はしない方が良いと判断した広秋、そして…

「ま、あそこから抜け出して三年が立つからどうなったかは知らん、でも、学園都市（こく）に来て良かったと思ってるよ」

「そつか、嫌な事聞いて悪かったな、ところで…話を戻すが、どこに行きたい？皆」

そう言われて考え込む一真達、すると美夜が…

「では…緑地公園にでも行きませんか？

皆さん？」

「緑地公園か…良いんじゃないか？」

そう言いながら賛成の意向を見せる一真と皆、すると…

「お…楽しそうな話をしている様だな…俺も混ぜてくれよ」

「あら…何で兄貴が居るの？」

部活はどうしたんだよ？」

そう説明されて現れたのは楓の双子の兄、匡正である、

「おう、匡正か…杖術部はどうしたんだ？」

「ああ…大丈夫だよ、てか、完全に忘れてる見たいだが…俺、もう引退したから、結構暇なんだよな…」

そう言っつて全員の近くに座る匡正、彼も混ぜての会議が開かれた、

「…まあ、明日行くのは良いが…その前にやらないと行けない事がある」

「…仕事か？」

そう聞かれた匡正が仕事では無いと言う顔をする、

「…仕事では無い、これはミッションだ…!」

「…(出たよ匡正の理屈、しかしま、いつもの事ながら凄いな…)」

そう考えて居る一真、それに対して匡正が…

「…何か言たそうだな、一真よ…」

「いや、別に…ところで今回のミッションは誰が行くんだ？」

そう聞かれて考え込む匡正、そして…

「そうだな…一真と楓、隆司と詩乃ってとこかな？」

「メンバーは分かった、うんで？
今回のミッション内容は何か？」

そう聞かれてすぐに発表する匡正、

「今回はな…三階の音楽室から聞こえる不審に音と、理科室の幽霊騒ぎの沈静化だ…二つとも、教員側からの依頼だ」

「…どちらも、普通に嫌がらせにしか見えんな…」

そう言って頷く一同、しかし、一真は一つの疑問を抱いていた、

「…今回のミッションに武器は必要ないだろうか？」

「そうだな…一応、生徒の悪戯の可能性が高いから、灸をすえてやれと言われて居るからな…」

そう言われて溜め息を出す一同、そして…

「…つまり、竹刀やエアガン辺りにしとけと言う事なのね…」

「そうなるな…」

「…ガキの遊びじゃあ有るまいし…」

そう言って苦笑する広秋と楓、それを聞いて居た匡正が…

「でないと、お前等は殺しかねん武器を持ち出しそつだからな…」

そつ言われて今度は言い返せない二人、すると晃平が…

「あははっ、良いじゃん、楽しいし」

「楽しくない!！」

そつ同時に突っ込みが入れる二人、そして…

「まあ、良じゃあないか、それじゃまた夜にな…」

そつして解散した一真、そして時間は過ぎて放課後…

「一真く、遊びに行こうぜ!！」

「…すまん、今日は用事が…」

そつ言つてスタスタ教室を出て行く一真、そして一度帰り、夜になり校舎の前に集合して居た…

第二話 完

第二話 時の流れと今（後書き）

如何でしたか？

また早めに投稿します

第三話 風紀委員長との出会い（前書き）

少し時間が空いたので連続投稿します。

第三話 風紀委員長との出会い

昼休みに言われて通り集まる一真達、そして今、壮絶なバトルが繰り広げられようとしていた、

「…で、どっちがどちらに行くんだ？」

匡正

「そっだな…うんじゃ、隆司と詩乃で音楽室に、一真と楓は理科室の件についてだ」

それぞれ反応はまちまちだったが、全員が納得した様子である、

「では…ミッションスタートつと言いたいところだが…まずは武器の確認からな」

「…やはりそこからか、ま、良いけどさ…」

一つ一つ確認して行く匡正、すると有る事に気付く、

「…楓、この鞆を持ち込むのは認めないからな」

「何故だ!!」

「危険だからだ」

匡正から鞆を受け取り驚愕する一同、何故ならば…スタングレネードが二つ、手榴弾が三つ、プラスチック爆弾が二つ、コンバットナイフ、MP5クルツA4とVZ61スコープオン（早い話がサブ

マシンガンである）を一挺ずつ、そのマガジンを合せて二十個ほど入って居る、それを見た隆司が…

「お前は学校で戦争でも始める気か！！
てか、昼に注意されたばっかじゃないか!？」

「…だって、エアガンじゃあ殺傷力がきちんと無いじゃ無いか」

「殺す前提にすんな!!」

取り合えずその鞆は匡正に預けとくぞ」

「…じゃあ、銃以外の武器を…」

「却下だ」

ボケとツツコミをやって居る様にしか見えない二人、それを見ていた一真と匡正が…

「…なあ、匡正？」

こいつらがコンビで良くないか？」

「そうだな…うんじゃ、一真と詩乃で理科室の騒動を沈静化して来てくれ」

「分かった、出来るだけ早くして音楽室も行くところか？」

「まあ、それは出来れば良いぞ、それじゃ…ミッションスター
トだ」

「了解」

そう言い残し二人は三階にある理科室に向かう、それから二分後…

「…ここだな、しかし不気味だな、夜の校舎は…」

「そうだね…」

少し震えている詩乃、彼女も例がいなく一真達と一緒に戦場に居たのが、幽霊などの類いは全くダメなのである、

「…安心しろ、この世に幽霊なんて居ない、それに…何が有っても俺がみんなを守る」

「…うん、そうだね…」

そんな事を話していたが、急に真剣な顔付きに変わる、一真

「この臭いは…煙草だな、なるほど、そう言う事が」

「…夜の校舎で不良が煙草を吸う為に溜まり場になっているんだよね…」

「そう言う事だ」

そう言って少し考えた後、一真が…

「…今から突入してシバき上げて来る、さて…異存は無いな？」

「ええ…気を付けてね…」

「ああ…」

そう言って理科室に入る一真、そして、電気を付けた、

「だ、誰だ!!」

「残念ながら…雑魚に名乗る名は持ち合わせて無いもんで…」

「何だと!!!」

そう叫びながら殴りかかって来た不良二人、しかし…

「はあ…竹刀を使うまでも無いな…」

そう言いながら走って来た不良を一撃の蹴りで伸した一真、

「さて…あと二人しか居ないぞ、どうする？」

降参するか？」

「うんな訳行かねえな、何故なら…お前はここで死ぬんだからな
!!!」

そう言いながらナイフを持ち、下品な笑いをする不良、それを見
た一真が…

「下品な輩だな…品性の欠けらも無いな…」

「何だと？」

もう一度聞き直そうとしたが出来なかった、何故なら…

「があああ!?
痛てえ…!!!!」

そう、一真の手により肩の関節を外されて居たからである、

「さて…君で最後だ…」

一真が近付いて行くと不良は悲鳴を上げながら逃げて行った、しかし、一真も詩乃も追いかけてようとはしない、何故なら…

「…貴方が主犯の様ね」

「ああ？」

何だ、お前、いきなり足止めしやがって」

そう、逃げ出した不良生徒の前に一人の女子生徒が立って居た為、止まったのである、

「どけっ!!!」

俺は急いでるんだ」

「分かったわ、退いてあげる」

そう言った次の瞬間、女子生徒の腰に差して居た刀を抜いた様に見える、しかし、気付いたら彼女は不良の後ろにいた、そして…

「…もう行って構わなくてよ、でも…まともに歩ければの話だけど…」

彼女が微妙に納まって無かった刀をきちんと鞘に納めた瞬間、不良の制服は跡形も無く消え去っていた、

「…（かなり出来るな、こいつ…）」

「さて…理科室にいる二人、ちょっと来なさい」

女子生徒に呼び出されてそちらに向かう二人、そして…

「…貴方達ね、会長が言ってた助っ人って」

「そうだろうな…」

「そんなに堅くならなくて良いわよ…私は桜樹 佳奈、佳奈で良いわ、貴方達は？」

そう言われて少し考え込む一真と詩乃、そして…

「鍊条 一真だ、一真で構わんぞ」

「神崎 詩乃です、詩乃で構いません、どうぞよろしくお願います」

「よろしくね、詩乃さんと一真君」

一真と詩乃が挨拶を済ませた二人、そして今度は一真が…

「じゃ、次は俺からの質問だ」

「…スリーサイズと体重以外なら教えてあげるわよ？」

「聞くか！！！！！！」

激しくツツコミを入れる一真、それを見て苦笑する佳奈、

「はははっ、冗談よ、で？」

何が聞きたいの？」

「…あんた何者だい？」

「私？」

私は風紀委員長だよ？」

「…（何か隠してる様だがまあ良いか…）」

そう思いながらも決して口に出さない一真、すると今度は佳奈が…

「次は私の番ね」

「…成績と彼女が居るか否かの問いと過去以外ならできる限りは答えよう」

「…（知りたい事は全部話してくれないか、ま、初対面では教えてくれないか…ま、仕方無いか…）生徒会長に許可を得て居るのは知ってたけど…どこから侵入して来たの？」

「玄関から堂々と…」

そう言われて納得した佳奈、そして…

「そう…ところで、二人とも風紀委員会に入らない？」

「…いや、止めとくよ」

「そう？」

貴方達なら即戦力なんだけど…ま、良いけど、気が向いたら言つて頂戴…それより、気になって居ただけれど…残りの不良生徒は？」

「ああ、彼らならそこで伸びてるよ」

一真が指先には不良生徒が倒れている、それを見た佳奈が…

「…これ、全部一真君一人で殺つたの？」

「気のせいかな？」

殺るの字が違う様な気がするんだが…まあ、伸したのは俺だが？」

「そう…」

少しの間考え込む佳奈、そして…

「やはり貴方は我が風紀委員会に是非とも欲しいわね…」

「…残念ながらそれは無理だな」

「どうして？」

「…この学校の何人ぐらいが知って居るか分らんが、俺、一応は副会長だし」

そう告げられて驚きの表情を浮かべる二人、どうも知らなかったらしい、

「…ま、公の場での活躍& a m p・会議すら出て無いからな…」

「良くそんなんで副会長の座から下ろされないわね…」

「だから暗躍的な活動を引き受けて居るんだよ…」

「学校側からの依頼で？」

そう尋ねられて少し悩んだ末一真が…

「…そうだ、今回の様に苦情の対象や事務的な事をする場合もある…ま、生徒会長直属部隊みたいなもんだ」

「…まるで子供の遊び見たいだわ」

「…ま、実案を出したのは匡正…進藤が提案したんだがな…」

それを聞いた瞬間、佳奈の表情は一転した、

「進藤って、あの杖術部の元部長の？」

「そうだが…あいつそんなに強いのか？」

「強いも何も…最強と言われるこの学園都市の五指に入るぐらいの強さよ…!」

「ふん、そんなに強かったのか…能力無しで」

そう聞かれて頷く佳奈、それを見た一真が…

「なら強いだろうよ、あいつ並の人間じゃあ相手にならないからな…昔、あいつは能力者五十人を一瞬で蹴散らしたらしいし…」

「…軽く言ってるけど、貴方の実力は？」

「そうだな…匡正と隆司、詩乃と広秋が全力でかかって来ても、二分で伸す自信があるぜ、それに…匡正に負けた事は一度も無い…」
それを聞いて呆れ返る佳奈、

「…ちなみに、私と殺り合ったらどうなの？」

「さあ…今のあんたじゃ相手にすらならんだろうよ、しかし…あんたは俺と違い、これから伸びるだろうよ…能力的にもな」

「そうですか…って、ちょっと待って下さい、一真君は能力者じゃあ無いの？」

「うん？」

全くとまでは言わんが、回復系統の方術以外は全く使えないぞ？」

驚愕の真実を突き付けられた佳奈、そう、一真は能力者ではあるが、楓や広秋達の様な事は一切出来ない最低値の能力者なのである、しかし、彼らの上に行く武術を持って居るからこそ肩を並べて戦えるのだ、

「…本当に貴方には驚かされっぱなしですね、ますます気に入っ

たわ

「そいつはどうも」

そんな事を話して居ると…

「匡正からメールだ…戻って来いとさ」

「…行くの？」

「ああ…俺の仕事はここまでだ、あとは、佳奈さん、貴方の仕事だ、じゃ、またな」

そう言い残して夜の校舎内に消えて行く二人の姿を見送る佳奈、
そして…

「鍊条　一真君か…相当腕が立つみたいね、でも…かなり悲しい目をして居たわね…まあ、今考えても仕方無いが、さ、仕事仕事」

こうして出会ってしまった二人、そして動き出す歯車、果してこの先どうなるのかはまた先の話です。

第三話　完

第三話 風紀委員長との出会い（後書き）

如何でしたか？

つまらないかも知れませんがお付き合いいただきありがとうございます。

ではまた

第四話 再会（前書き）

昨日に引き続き投稿

第四話 再会

匡正のメールにより玄関前に戻って来て居た一真と詩乃、

「で？」

「どうだった、理科室の件は…」

「ああ…予想通り不良が居たぞ、てか、煙草を吸ってから軽く殺つといたよ」

「うん？」

「今、何か最後の方の漢字変換が違った様な…」

疑問に思う隆司、それに同意する楓、それを見て居た匡正が…

「ま、良じゃあないか、ところで…音楽室の方はどうだった？」

「聞いて驚け…何と、誰も居なかったぜ」

それを聞いて居たその場に居た一真以外が悲鳴を上げたり驚愕した表情を見せている、そんな事をして居ると、何処からともなく機械の起動する音がして来た、

「……………」

全員が慌てている中で冷静に音の鳴る方を探す一真、そして…

「…なるほど」

そう言いながら少し不審な点を見つけたらしく、そこに手を突っ込む、そして…

「落ち着け、そして、こいつを見る…」

「…何なの？」

その機械は…」

「…簡単に説明すると、盗聴器とその再生装置だな…何が盗聴器されてるかは知らんがな…」

そう告げられて何が録音されて居るのか分からないため取り合えず隆司が預かる事になった、

「…まあ、取り合えず、ミッションコンプリートだ、じゃあ、後の事は俺がやっつくから良いよ、うんじゃ解散だ、明日は時間通りに来てくれ…じゃあな」

そう言って校舎の中に消える匡正と隆司、そして…

「…仕方無い、やる事もやったし、帰るか二人共、途中まで送る」
「う」

「分かった…」

「送ってくれるのは嬉しいけど…送り狼になったら銀弾ぶち込むわよっ…」

「なるか！…！…！」

そう言いながら夜の校舎を歩いて外に出て行ったのだ、

翌日…

「ふあああ、良く寝たな、しかし…良く考えてみると…緑地公園に行つて何をするんだか…」

こうして一真の一日が始まったのである、

午前十時…

駅前に来た一真と優香と美夜、ちなみに他の面子は集合していない、

「…驚くべき団結力の無さだな…ま、仕方無いか、いつもの事だしな…」

そんな事を呟いて居ると…

「…やはり先に来て居たか…すまん、出るのが遅くなった」

そう言つて到着した匡正と楓、どうも寝坊したらしい…

「…構わない、いつもの事だし…それにしても、残りは何？」

そんな事を尋ねた一真、次に来たのは…

「…ごめんなさい、遅れてしまつて」

「珍しいな、詩乃が約束の時間に遅れて来るなんて…」

「ええ…少しね…」

詩乃が理由を言おうとした瞬間、それはバイクの音にかき消された、

「くそっ、やはり数分遅れたか!!」

嘆きながらバイクから降りて来たのは広秋である、

「だから早く起きろって言ったのに…」

後部座席からヘルメットを脱ぎながらそんな事を言う晃平、

「うるせえ!!」

大体、何で俺のバイクの後ろにお前を乗せないと行けないんだよ!!」

「まあ、良いじゃん、減るもんじゃあ無いんだし」

「良くねえから言っただろうが!!」

「お前ら五月蠅い、詩乃が話せないじゃないか!!」

二人に向けて手榴弾を投げ付ける楓、それが爆発するとともにどこかに飛んで行く二人、数分後…

「楓、殺す気か!!」

そう言って戻って来た二人、それを見た一真が…

「不死身だな、こいつら…てか、絶対に馬鹿だ…」

冷静かつ飽きた表情でツッコミを入れる一真、それから十分後…

「すまん、少しやる事が有ってな、学校に行ったらこいつに掴ま
つてな…」

「会長？」

「こいつとは私の事ですか？」

そう言って隆司の隣りで刀に手を回して居る佳奈がそこに居た、

「…何で佳奈さんがここに？」

「今日は暇だったから、会長がどこかに行くのを見つけて聞いた
ら皆さんでどこかに行くようでしたので…」

「…単刀直入に言っ一緒に来たいと言えば良いじゃ無いか…」

「…同行させて居ただいて構わないですか？」

そう素直に聞くと全員が心良く頷いた、

「…ありがとうございます、あ、自己紹介がまだでしたね…私の
名前は桜樹 佳奈、佳奈で構いません、風紀委員長をやっています」

「よろしく、俺は西江 広秋、うんで、こいつが岡本 晃平だ」

「よろしく、岡本君に西江君」

軽い挨拶を済ませる二人、そして次に…

「…私の名前は彩井 美夜です、美夜と読んで下さい」

「私は古川 優香、優香で構わないわ」

「最後は俺らか…俺は進藤 匡正、で、こっちが妹の楓だ、妹共々よろしくな」

「よろしくお願ひします、楓さんに美夜さん、それに優香さんに匡正君も…」

と言う訳で…一真達一向は緑地公園へと向かった、しかし…

「さて…公園に来たは良いが…やる事が特に無い、しかし、緑凜堂は十二時にならないと開かない、さて、どうする？みんな」

「じゃあ、クレー射撃でもするか」

そう言ってクレー射撃用の道具を取り出した楓、そこにすかさず一真が…

「お前、今どっから出した、その道具…」

「どっかって…ここから…」

鞆を指差す楓、それを見た一真が…

「どうなってるんだよ!!」

その鞆はアレか？

お前の鞆は猫型ロボットのポケット並か？」

「ちよつと違つ、これは鞆だ」

「どう違つて言うんだ!!」

有り得んだろうか!!」

が…
いつも以上に激しくツツコミを入れる一真、それを見て居た晃平

「そうだよ、こつ言つところに来てやる事つて言つたら、やっぱり…牛の刻参りだろ」

晃平、
そう言つてポケットから藁人形と釘、そしてハンマーを取り出す

「待てえい、時間帯が違つし、それにアレは神社でやるもんだ!!」

「でも、最近じゃあどこでも良いらしいぞ」

「そんな事あるか!!」

そう言つて晃平が持つて居る物を没収する一真、そして…

「それならば…」

「却下だ」

「まだ何も言っていないぞ!!」

「今までの流れからして下らなそうだからだ」

そう言っただけで広秋の意見を完全に無視する一真、落ち込む広秋、それを
見て居た匡正が…

「それなら…みんなでバトミントンでもやるか？」

「ヴァ都民屯？」

何なんだ、それ？

新しい武族の名前か？」

「…どう聞き間違えたらそうなるだよ、楓よ…」

そう言っただけで冷静にツッコむ一真、それからみっちり三十分、楓に
バトミントンが何かを教えるハメになった一真で有った、そして…

「なるほど…つまり羽突き遊びみたいな物か」

「ま、ぶっちゃけるとそうなるな…てか、やった方が早いな」

そう言っただけで羽とラケットを出す一真、ちなみに匡正と広秋は何か
良く分からない試合をしている、（おもに技名が出てくる時点でおか
しい）、他のメンバーは楽しくやっている、それから二時間…

「ふう…良い汗掻いたな、広秋」

「そうだな、匡正」

「どつでもいいが、お前ら色々と間違ってるぞ…」

唯一まともに状況を理解し、冷静におかしいと告げる一真、すると匡正が…

「一真…一つ言っておく、楽しければそれでよし!」

そう言っつて爽快なまでの笑顔と親指を立てる匡正、それを見た一真が…

「もう良い…ツッコむのに疲れた…諦めるよ」

「そうか？」

お疲れさん、でだ、これから緑凜堂に行くが良いか？

「もう良い…好きにしてくれ…」

完全にいじけてしまった一真、それを見て居た佳奈が…

「貴方も大変ね、一真君…」

「…もう諦めてるから良いやい」

なぜかいつもとキャラが違う一真、かなりレアな状況である、

「お〜い、一真と佳奈、おいてくぞ〜」

「あ、は〜い、行く、一真君」

そう言っで一真の手を引いて走り出す佳奈、ちなみに、未だに立ち直れて居ない一真である、それから数分後、彼等は緑凜堂の前に居た、その中に入ると…

「いらっしやいませ〜って、一真君と隆司じゃあ無い、久し振り〜」

「お久し振りです、みなさん、てかみなさん、相変わらずその格好何ですね…」

「仕方ないよ、一真君、店長の趣味だからな…」

そう、この店は喫茶店ではあるが…男性と女性の制服がメイド服と執事服なのである、

「…相変わらず変な趣味してますね」

「悪かったな、こっちの方が客に人気があるんだよ」

そう言いながら店の奥から店長が出て来た、

「…すみません、師匠、でも、これはいかがの物かと…」

「…そんなに変か？」

「一真よ…」

「正越ながら俺もそう思います」

「隆司までか…少し考え直す必要がありそうだな…」

そう言いながら激しく考え込む店長、その会話を聞いて居た匡正が…

「…ところで、紹介はしてくれないのか？」

一真よ…」

「ああ…すまん、この人は言わずと知れた俺達の師匠である人で、名前は霧島 翔さんだ、俺達の親みたいな人だ」

「霧島 翔だ、よろしくな」

翔が自己紹介を終えると今度は匡正達が紹介を始めた、それから数分後、優香との約束のパフェと他のメンバーの物を頼んで、テールで食べて居る、ちなみに代金は一真達の友人だからと言う事でタダである、そして、一真と隆司はカウンターでコーヒーと紅茶を飲みながら翔と話していた、

「あ…そう言えば、師匠、この前の手紙の内容、アレなんだったんですか？」

「そうですね、俺にも届いてたけど…結局、なんだったんですか？」

「アレか…今は余り気にするな、時が来たら教える、ところで…お前ら、来週から暇か？」

翔のいきなりの問い掛けにびっくりする二人、そして…

「ええ…確かに今は夏休みで暇ですけど…」

「それなら…今居る全員にこの店の手伝いを頼みたいんだが…」

「それは構いませんけど…匡正達の意見も聞かないと」

そう言つて匡正達の方を向く一真、すると…

「俺達は別に構わんよ」

「だ、そうです、手伝いましょう」

「ありがとう、うんじゃ来週から来てくれ」

「分かりました」

残っていた紅茶をゆっくり飲み干す一真、そして、全員が食べ終えの確認した一真が…

「それでは師匠、また来週来ますよ」

「あ…一真、ちょっと舞つてくれ」

「どうしました？」

師匠

一真だけ残して他は外に出て言つて、

「すまんな、すぐに終わる」

「はあ…」

「一真、最近右腕に違和感を覚えた事は無いか？」

真剣な顔付きで尋ねる翔、それに対して一真は…

「…いいえ、全く、と言うかここ数年、そんな事を感じた事は無いです」

「そうか…なら良いんだ、引き止めて悪かったな」

「はあ…」

そう言って店を後にする一真達、それを見届ける翔、そして…

「この平和が何時までも続くと良いな、一真よ…」

そう言ってまた何か考え込む翔、そして…

「そう簡単には壊させないか、最後はお前が全て守らないとならないんだぞ…」

夕焼けを見つめながら独り言を言う翔であった…

第4話 完

第四話 再会（後書き）

如何でしたか？

ではまた後ほど…

第五話 初めての道場破り(前書き)

連続…投稿

第五話 初めての道場破り

一真は考え込んでいた、あの師匠の最後の一言を…

「…（師匠が言っただけの話…実は雨の日に異常に痛むんだがな…）」

「一真さん、さっきの話…嘘をつきましたね？」

「…美夜には聞こえてたのか？」

「聞くつもりは無かったです…」

少し落ち込んだ様になる美夜、それを見て居た一真が…

「まあ、気にするな、それに…あながち嘘では無い、確かに痛みはするが、それだけだ、別段問題は無い」

「それなら良いんですが…」

などと話して居ると、匡正が…

「おい、二人とも、早く来いよ、追いてくぞー!!」

「おっと…匡正が呼んでるな、行こうぜ、美夜」

「はい」

そう短く返事をする美夜、こうして夏休み一日目は無事終了した、

ちなみに、広秋のバイクは見つからない様にガレージに居れたとか…

それから二日後…一真は学校にいた、その訳は…

「…しんどいな、真夏の学校は」

「仕方無いだろ、公の場に出ない代わりに暗躍と書類整備を手伝うと言ったのはお前だろうか」

「まあ、そうだがな…」

そう言いながらも楽しそうな一真、それを見た隆司が…

「…一真、なんだかんだで楽しそうだな」

「ふっ、そう見えるか？」

隆司よ…」

「ああ…満更でも無いって顔をしてるぜ」

「かもな…五年前では考えられない生活だからな…」

そう言われて頷く隆司、そして…

「そうだな…俺達、戦闘孤児にとって、こんな平和な環境は存在しないしな…運が悪けりゃ一生戦場で過ごすハメになるしな…」

「…でも、俺らは今ここに居る、そう、戦場とは無縁の世界にな…」

そう言いながら納得する二人、するとそこに…

「た、大変です、会長!!!」

そう叫びながら生徒会室に駆け込んで来たのは袴姿の青年と少女だった、

「…どうしたんだ？」

そんなに慌てて」

「それが…」

「実は道場破りが来たんです」

そう言われて不審に思う一真、そして…

「何で道場破りなんかされたんだ？」

「…貴方は誰ですか？」

「…錬条 一真だ、副会長だ」

「さいですか…つと、そんな事より何とかして下さい」

そう言われて考え込む隆司、それを見て居た一真が…

「俺が行こう、隆司」

「待て、お前は生徒会の影だ、表に出るのは俺だけで良い…」

「確かにそうかも知れない…でもな、目の前で苦しんでる人を救いたいんだ、昔、俺の為に協力してくれて、一緒に来てくれたお前から見たいにな…」

「…そうか、でも…お前一人に行かす訳にはいかない、匡正を呼んで来るから待ってる」

そう言いながら生徒会室から出て行く隆司、それから五分後…

「よう、呼んだか？」

「一真」

「ああ…実は道場破りをぶちのめそうって話しになってな…乗るか？」

匡正よ…」

「もちろんだ!!」

そう言い残して道場に向かう一真と匡正、こうして二人の戦いが始まった、それから数分後、二人は屋上に居た、

「…で？」

「ここらかどうやって行くんだ？」

「一真」

「剣道部の主将を人質に取られて居てどうしようも無いから俺達を尋ねた訳だ…」

「なるほど…って、ちょっと待て、剣道部の主将って筋肉モリモリのゴリラみたいな奴じゃあ無いのか？」

「…いや、剣道部の主将は美人で有名だぞ、てか、何より俺達と仲が良いぞ?」

一真の一言で連想出来る人物が一人いた、

「まさか…」

「…そうだ、俺も聞いて驚いた…」

そう、何を隠そう人質になって居るのは、桜樹 佳奈だからだ、一方その頃、佳奈は…

「…（不覚ね…こんな下賤な輩に捕まるなんて…）」

「がはははは…愉快、愉快、いつもお高い風紀委員長様がこんな事になるとはな」

現在の状況は、地面に顔をへばり付いた状況でナイフを突き付けられて、いつもの刀を取り上げて持って居ない、回りには不良が大量に居るのである、

「…（武器がアレば…何て思ってる場合じゃあ無いか…一真君、来てくれないかな?）」

そんな事を考えて居る佳奈であった、その頃一真は…

「へえつくしよん!?!?!」

「何だ?」

「一真、風邪でも引いたのか？」

「さあな、でも…いや、何でも無い…（美夜にバレたら殺されそうだな…）」

「ふうん？」

「ニヤけながらそう言う匡正、それを見た一真が…」

「…ニヤけないで良いから、それにあんまり大きい声を出すなよ？」

「おっと、すまん、それに…ミスったら危ないしな…」

そう、彼らは今、屋上から屋根を渡って道場を目指している、それから五分後…彼らは道場の屋根の上にあった、そして、壁をつたって窓際に行き、そして…

「そりゃああああ…！！！！！」

そう言いながら窓ガラスを割って乱入して来た匡正に驚く不良の集団、その後に続く一真、そして…

「…匡正よ、もう少し静かに行動出来ないのか？」

「失礼、でもな、こうでもしないと盛り上がらないだろう？」

「…：そう言う問題じゃあ無いだろう！！！！！」

そんな異常な口論をしている間に不良の集団に囲まれて居た、

「テムエら調子に乗ってんじゃあねえよ!!!!!!」

「…ほら言わんこっちゃ無い…」

そう言いながらも背負って居た袋から一振りの刀を取り出した一真、それを峰にしている、ちなみに相手の武器は釘バットや鉄パイプなどの鈍器である、

「殺つちまえ!!!!!!」

その一言で一斉に一真と匡正に襲いかかる不良集団、しかし…

「ふふふ…この時を待つて居たんだよ!!」

そう言いながら彼が手に持つて居る獲物は、せいりゅうえんげつとう青龍偃月刀である、
(青龍偃月刀と言えば、三国志に出て来る蜀の武将、間雲長も愛用したとされて居る)

青龍偃月刀を振り回す匡正は正に鬼神、一瞬にして相手方を半壊にさせたのである、

「…一つ聞くが…殺して無いよな？」

「…多分な」

「多分ってアバウトな…」

しかし、辺りを見渡す限り怪我人は居ない、それを見てひとまず安心する一真、しかし、次の瞬間、第二陣がやって来た、

「…やれやれ、性懲りも無く…仕方ないな…」

そう言いながら今度は一真が構えを取る、

「…久し振りに羽目を外して見るかな…」

一真は大きく息を吸い込み気合いを入れた、そして…

「来いよ、ゴミ共、遊んで殺るよ」

普段では考えられない性格に変わる一真、そして…

「散れい!!」

克心流 げっかれんげき 月火連劇

(説明します、この月火連劇とは、克心流において珍しい、剣と鞘を使う物で、連続して斬撃を繰り返し、最後に鞘による打撃を与える技である、名前の由来は月の様に高く飛び上がり、終わった後に飛び散る血が火の様に見えるかららしい…)

謳歌連劇により吹き飛ばす不良集団、すでに壊滅寸前に陥って居た、そして、数分後…

「…貴様が最後だ、さて、どうする?」

「くっ…こうなったら俺様自身が出るしか無いな…」

そう言いながら横に置いて有った剣を取る不良の大将、そしてそのまま突っ込んで来た、

「死ねや！！！！」

無形の型のままで突っ込んで来る不良の大将（略してフリオ）が一瞬消えた様に見えた、しかし、次の瞬間…

「太刀舞焰流 龍牙突」
りゅうがとつ

（説明します、龍牙突とは、神速を超える突きを繰り出す技であるが、余りの早さに見切れないとか…）

龍牙突を軽やかに避ける一真、そして、そのまま壁を突破って外へと飛び出るフリオ、それを見た一真が…

「…あゝあ、やっちゃた、修理代は何処から出ると思ってたんだよ…」

「…一真君、壁の修理はどうするの？」

「…そこいらに転がってるのと、フリオから一万くらいずつ巻き上げれば良いだろう…」

ちなみに倒れている不良の数はざつと五十人…約五百万の賠償を払わせる気で居るのだ、しかし、それを聞いて居たフリオが…

「はっ、そんなもん払う気は無いね」

「そうかい…ならば…むしり取ってやるよ」

そう言いながら刀を構える一真、それと同時に剣を構え直すフリオ、そして…

「…さて、そろそろ終わらせようぜ、フリオよ…」

「…良いだろう、来いや！！！！」

走り出した二人、しかし、二人は技の構えを取らずに、己の力を示すかの如く…そして…決着は付いた、

「ぐふっ…何て強さだ…」

「…急所は外しといた、死にはしない、だが…反省をしろ」

そう、一真は最終的に峰打ちから刃の方へ変えて居たのである、しかし、フリオから流れ出ている血の量は半端ない…それを見た佳奈が…

「…！！！！」

「イヤアアアアア！！！！！！」

悲鳴を上げて倒れてしまった、

「おい！！！！」

桜樹、しっかりしろ！！！！」

「匡正、落ち着け、取り合えず彼女を保健室に連れてくぞ」

こうして保健室に担ぎ困れた彼女、そして過去に何が…真相はいかに…

第5話 完

第五話 初めての道場破り（後書き）

如何でしたか？

また早めに投稿することになっているので、良ければ読んでみてください。

では

第六話 世界の闇（前書き）

今回は長いかも…

第六話 世界の闇

一真達に運ばれた佳奈は未だに目を覚まして居なかった、

「…どうにか小康状態になったか、桜樹は…」

「…ああ、だが、先程の反応は少しおかしく無かったか？」

「ああ…そうだな、少し調べて来る…」

そう言い残して保健室を出て行く匡正、それを見送る一真、それから数分後…

「…ふう、喉が沸いたから何か買って来るか…」

そう呟きながら立ち上がり飲み物を行こうとした瞬間…

「晴香…はるか…」

「…？」

(うなされて居るな…しかも、泣いてる?)

不思議そうな表情をする一真…彼は小さい頃、喜怒哀楽がほとんど無かった為、未だに感情表現が難しいらしい…

「…なんで泣くのか未だに理解に苦しいな…」

そんな独り言を言って居ると、佳奈は目を覚ました、

「…？」

「真君？」

「そうだ…気がついたか？」

「…私、何時間ぐらい寝てたの？」

「さあな、二時間ぐらいじゃあ無いか？」

時計を見ながらそんな事を言う一真、

「そう…（また、あの夢を見た…）」

「なあ、佳奈、一つ聞きたい事が有るんだが…良いか？」

「何かしら？」

私の答えられる範囲なら良いわよ？」

「この何気ない一言が、後に過去を語る羽目になる事とはまだ知らない佳奈、そして…」

「…サンキューな、では…血にトラウマが有るのか？」

さっきのから察するにだがな…」

「…有るわよ、確かにな」

顔色が段々と悪くなって行く佳奈、それを見た一真が…

「あ…すまん、聞かなかった事にしてくれ…」

「…いいえ、ただ…私の過去になってしまっからどうだろうと思っ…」

「…話してくれるか？」

そう一真に聞かれて考え込んだ後、頷く佳奈、そして…

「…まずは私の本名を教えてあげる」

「本名？」

じゃあ、今名のっているのは偽名なのか？」

「まあね、で、私の本名は相沢 佳葵って言うの」

佳葵と名乗られた瞬間、一真は驚きの表情を浮かべた、

「佳葵って、まさか…あの閃裂せんれつの…？」

「懐かしい通り名ね…」

「驚いたな…まさか、あの伝説の古流剣術…古式飛燕流こしきひえんりゅうの使い手だったとは…」

「あら、戦場で有った事は無いはずよ？
克龍の一真君？」

そう言いながら笑う佳葵、それを見た一真が…

「…自分の立場が分かっているのか？
有名だぜ、佳葵よ…」

「あら…貴方達程では無いわ、（戦場のワルツ）の異様を持つ貴方達ほどでは…ね」

「…昔の話しだ、さて、何で俺達が昔、戦場に居た事を知って居るんだ？」

そう聞かれて考え込む佳葵、そして…

「…刻騎士の柳斎って言う男を探して居るの」

「刻騎士…って、ちょっと待て、あの小太刀舞焰流を使う奴か！？」

「そうよ？」

それを聞いた一真が…

「…何が有ったんだ？」

「あいつは…私から全て奪ったのよ！！」

そして佳葵は段々と過去を話し始めた、

それは今から十年前、私は有る会社の社長の娘であった、そして彼女には年の二つ離れた妹が居た、

「お姉ちゃん待ってよ〜」

「晴香、早くおいで」

私達はとても仲が良かった、と言うよりは家族全員が仲が良かったのだ、そんな幸せな生活は突如終わりを告げた、

「お嬢様!!」

お逃げ下さい、私どもに構わずに早く!!」

次々と殺されて行く執事やメイド、そう、有る一人の男によって…

「ああ…」

私と晴香はただ泣く事しか出来ずに居た、そして…

「娘達には手を…」

父親が最後まで言い終わる前に斬り殺されて居た、そして…男は晴香を抱えあげた、

「晴香を離して!!」

私は叫んだ、しかし、現実は甘く無かった、私は壁まで飛ばされて思いつ切り背中を打ち付けた、そこで私は気を失った、

「…次に目を覚ました時にはすでに何処かの施設に居たわ」

佳葵の話の黙って聞いて居た一真がついに口を開いた、

「…なるほど、大体の話は分かった、それと有る事を思い出した」

「有る事？」

「真の一言に眉を潜める佳葵、そして…」

「ああ、刻騎士の所属するところにな…」

「どっ！…！！！」

「…俺の予想だ、それに…多分、足を突っ込んだら戦いは避けられない、それでも良いのか？」

「覚悟は有るか、戦い抜く…」

「そう言っただけを刺したにも関わらず頷く佳葵、それを見た一真は…」

「はあ…分かった、俺の知る事を教えてやる、まず刻騎士の所属している場所…名をシャドウナイツだ」

「シャドウナイツ…？」

「そう言われて考え込む佳葵、しかし、結論が出そうに無いので一真に尋ねる事にした、」

「…シャドウナイツってのはな、この世界の闇その物なんだ」

「世界の闇？」

「…全ての影、裏の世界とは違う…闇その物だ…」

「それを聞いた佳葵は凄く驚いて居た、そして…」

「…ここまで聞いて臆したか？」

「…いいえ、むしろ望むところよ」

そう言いながら笑みを浮かべる佳葵、その時…

「…邪魔だったか？」

そう言いながら匡正が登場、それにより佳葵が…

「え…あ…あう…」

真っ赤な顔になり、かなり焦って居た、

「うん？」

どうしたんだ？

佳葵

「えつと…あつと…その…」

すごい勢いで取り乱す佳葵、それを見た匡正はニヤリと小さく笑った、

「良かったな、桜樹、両方の寮の改装が終わったからこれからはいつでも一真に会えるぞ」

そう、一真の通う学校は強制的に全寮制となって居るのだが、今回、余りに痛んで居た寮をリフォームしたのだ、ちなみに一真は師匠の家を借りて住んで居た為害は無かったが、晃平と広秋はテント暮らしだったらしい、

それはさておき、佳葵の顔は今にも噴火寸前の火山の様な表情に

なってる、そして…

「うづ…もう知らない!!」

泣きそうな顔をしながら走りさって行く佳葵、それを見た一真が…

「…匡正、いつも思うが…その性格は直した方が良さぞ」

「すまん、すまん、どうも癖になってるみたいだな」

そう言いながら少年の様な…笑顔を浮かべる匡正、それを見て呆れ帰る一真、

「はあ〜（後で謝りに行くのかな…?）」

「うん？」

どうした一真、いつもと違う表情だが…どうかしたのか？」

「…何でも無い、ところで、さっきの話は本当か？」

「ああ、本当だ、ちなみにルームメイトは俺で、隣りが広秋と晃平だ」

それを聞いた瞬間、嫌々な顔をする一真、

「…そんなに嫌か？」

「別に…取り合えず寮に行こうぜ」

そう言いながら保健室を後にする二人、ちなみに、保健室は学校

の南側にあり、寮はそのま逆の北側に有るのだ、寮まで移動した一真と匡正は驚いて居た、その理由は…

「…明らかにでかくなってるよな、匡正」

「ああ…俺も驚いた、まさかここまでとは…」

新しくなった寮の大きさは、男女の寮、合わせて市民体育館ぐらの大きさである（分かりにくい方は、学校にある体育館四つ分と考えて下さい）

取り合えず中に入って見る一真と匡正、果してここは学校の寮なのかと疑いたくなった、何故なら…

「…まさか真つ二つに分けて男女とは、寮自体を離せよな…」

「まあ、気にしたら負けだぜ、一真、しかし、踊り場が広いな…」

何が負けなのか分からない一真、それから二時間後、師匠の家から必要な物を運び込んだ一真は部屋で寛いで居た、

「ふう…」

「何で溜め息なんてついて…あ、あと悪いけど隣りとの部屋の壁はぶち壊すから…」

「本当に悪いよ、つか、ぶち壊したら問題だろ、匡正よ…」

一真の注意を聞き流すかの如く青龍偃月刀を構える匡正、それを見た一真が…

「…お願いだからその獲物を閉まっけて下さい、匡正さん」

「…一真がそこまで言うなら止めよう…」

そう言いながら青龍偃月刀を袋に直す匡正、それを見て安心する一真、そして…

「そろそろ飯の時間だな…行くか、一真よ…」

「そうするか…」

そう言いながら部屋を出ようとした一真、しかし、そうは行かなかった、なぜならば…扉が蹴り開けられたからである、

「…何者だ、お前らは」

「……………」

いきなり一真達の部屋に入って来たスーツ姿の男は無言でナイフを構える、しかし、一真は刀を構えない、つと言つか構えられないのである、その理由は…

「…（この低い天井じゃあな）」

そう、寮自体は大きいのだが、天井の高さは普通の天井の高さと変わらず約、二メートル半から三メートル程、さすがの一真でも刀を振る訳にはいけないのである、

仕方無く拳を作り体術の構えを取る一真、隣りの匡正も先程とは異なり真剣な顔付きで青龍偃月刀を構えて居る、性格には槍の構えだが、

「さて…匡正、どうする?」

「一真は空きを作ってくれ、あとは俺が何とかする」

「了解」

一真は返事をした後開いて居た窓からスーツの男を蹴飛ばして外に出し、その間に部屋の隅に置いて有った刀を取り、匡正と共に部屋を出た、しかし、二人は出た瞬間驚いた、なんせさっきのスーツが五着…じゃあ無くて、五人に増えて居たからである、

「…おいおい、マトリックスかよ、何で増えてんだよ」

「待て、匡正、アイツら…影が無い」

「…なるほど、早速動いた訳か…地獄耳だな」

一真と匡正は彼らを見て驚きはしたがいつもと違い、完全に臨戦体制に入って居るためそこまででは無かった、(ちなみに佳葵の事は寮に付く前に話しておいた為、匡正は事情を知って居るのだ)そして…

「…ほんじゃあ、そろそろ行きますか?」

「背中は任したぜ、匡正」

「ああ、行くぜ!」

勢い良く走り出す二人、しかし数分後、彼らはかなり劣勢に立た

されて居た、

「…正直に言っただけでしんどくなってきた」

「確かに…てか、正直言って卑怯臭い…」

愚痴りながらもスーツを切裂く一真、しかし、スーツが分裂してまた新たに現れるのである、ちなみに現在二人は学校の屋上に居て、スーツは軽く五十人を越えて居る、

「スライムか…！」

こいつらは…！」

「そうだな…試しに燃やして見たらどうだ？」

匡正

「そうだな…やる価値は有りそうだな…」

そう言いながら青龍偃月刀に炎を宿す匡正、そして…

「喰いやがれ…！」
ひえんさん
火焰斬

匡正の火焰斬（簡単に言うと、炎を宿した青龍偃月刀で雑払う技）により、炎上するスーツ、しかし…

「……………」

彼ら自体が溶けて移動し、少し離れたところで元の形に戻ったのである、

「…おいおい、マジでスライム染みて来たぜ、こいつら」

「…そうだな、しかし、きりが無いな、匡正よ…」

「そうだな、確かに終わりが見え無いぜ…」

スーツの攻撃を受け流しながら考える二人、不意に後ろを取られてしまった二人、

「…っ!!」

しまった!？」

「間に合わん!!」

そう思い瞬間的にガードを試みた、しかし、間に合う訳も無く敵の攻撃を受けた様に見えた、しかし…

「…殺らせはしない」

「そうだね、詩乃、その二人は殺させないよ!!」

その声と共に三本の矢と五発の弾丸がスーツ目掛けて打ち込まれた、しかし、先程と同様に分裂してしまった、

「…嘘、何で？」

「こいつらはシャドウナイトだ、分裂するスライム見たいなものだ!!」

隣りの校舎から侵入した詩乃と楓に一真が説明し、納得する二人、
そして…

「なら…分裂出来ないぐらいに攻めれば良い…」

「その意見にはボクも賛成だね」

詩乃が頷き、楓はシグのマガジンを変えて既にリロード終えて居た、しかし、安心をした一真達は次の瞬間、開いた口が塞がらなくなってしまうた、その理由は…

「…おいおい、それは無いだろ…」

「…きちんと倒した筈なのに…」

そう、全て木っ端微塵になるまで猛撃をしたにも関わらず、現在、一つの塊と化して居たのである、

「…不味い、完成する前に破壊する！！」

そう叫びながらながら構えたまま飛び上がる一真、そして…

「克心流 月火連劇！！」

月火連劇をかます一真、技を受けたふらつくスーツの塊、それを見て居た楓が…

「オマケだよ！！！！」

両手に持ったシグにより足と頭を打ち抜いた、そして、とどめと

言わんばかりに手榴弾を投げ付け、それが当たると同時に狙撃し駄目押しをした、しかし…それも空しくすぎまじい勢いで再生して行くスーツの塊、そして、スキを見せてしまった一真が殴り飛ばされた、そして、貯水タンクにぶつかってしまった

「がはっ…」

「一真…!!」

血を吐く一真、それを見て叫ぶ匡正、その全てを見て居た楓が…

「よくも一真を…オマエ、消えろ…!!」

完全にキレてしまった楓、どこからとも無く対戦車用ライフルを取り出して乱射している、

「楓、取り合えず落ち着いて…」

詩乃の説得も聞かず打ち続ける楓、しかし、彼女の乱射は有る人物の一言で止まった、

「止める、そいつにいくら打つても無駄だ…」

「一真、生きてたのか…」

匡正の一言に銃撃を止める楓、どうやら治まった様だ、そして…

「…多分これ以上の攻撃は無意味な気がするんだ…」

「じゃあどうするんだよ？」

「あの力を使う」

そう言いながら腕に巻いて居た包帯を外す一真、その下には何かの呪文の様な物が彫り込まれて居た、

「一真よ…まさか、あの力を使うのか？」

匡正の言葉に頷く一真、そして、次の瞬間、彼の腕から光が上がった、

「…我中に眠りし鬼の血よ、今こそ力を開放せよ」

一真が謎の文章を読み上げると同時に髪と目の色が綺麗な黒色から青色に変わって行き、最後には完全に青色になって居た、

「…初めて見た、一真の真の力…」

「…綺麗なコバルトブルー…」

匡正が驚きの声を上げ、詩乃が一真の髪を褒める、何とも奇妙な光景である、

「…みんな下がってくれ、巻き添えを喰う可能性がある」

「ああ…」

一真の一言に納得し、下がる匡正達、そして、刀にオーラを溜め始める一真、それから数秒後、完全にオーラを纏った刀を構えた、そして…

「…さあ、時空の狭間で懺悔^{ざんげ}しな、化け物が…」

一真が刀を振ると同時に空間が歪み始める、そして、やがてその歪みは亀裂に変わり、最終的に空間を切裂いた、

「……………!!」

「入りやがれ!!!」

空間を切裂いた部分までスーツの塊を蹴り飛ばす一真、しかし、後一步のところで踏みとどまってしまった、

「くそっ、後ちよつとなのに…」

「一真伏せて、ボクが次元の狭間にぶち込んでやる!!!」

一真が伏せると同時に対戦車用ライフルで正確に足を撃ち抜いて行く楓、そして…

「…楓、援護するよ」

詩乃が一斉に持って居た矢を打ち始めた、しかし、やはり火力が足りないのかふらつきはする物の倒れはしない、

「ここは俺の出番だな…」

高く飛躍する匡正、今度は頭の部分に集中的に猛撃を仕掛ける、すると遂に倒れる寸前まで行くがやはり倒れない、

「今だ、匡正、全力で火焰斬を打ち込め、俺も月火連劇を打ち込む、一気に畳み掛けるぞ」

「分かった、で、一つ聞くが…その技に名前は無いのか？」

「そうだな…強いて言うなら…げつえんれんがざんげき月焰蓮牙斬撃とでも呼ぶか…」

「OK、行かせ一真、月焰蓮牙斬撃!!」

一真と匡正は高く飛躍し、背中の部分に向けて月焰蓮牙斬撃をかけた、(ちなみにどんな技かと言うと、一真の月火連劇と匡正の火焰斬を同時に放つ技である、威力は半端では無い) もろに喰ったスーツの塊はついに次元の狭間に倒れた、

「よっしゃ!!」

で、この後はどうするんだ、一真よ」

「後は俺が刀からオーラを解除したら終わりだ」

そう言いながら刀を鞘に納める一真、それと同時に空間の亀裂が綺麗に消えた、スーツの塊も同様に…

「…凄いな、これが一真の力…空間の支配者…」

「性格には空間の鬼なんだがな…」

話しながらかなり苦しそうな顔をする一真、それを見た詩乃が…

「…一真、大丈夫？」

「…何と…か…な」

そう言い残し気を失う一真、彼の髪の色が青色から白色に変わって行くのを見た全員が青ざめてた、

「一真！！！」

しっかりして！！！！」

「落ち着け、楓、取り合えず寮の俺達の部屋に運ぶぞ…それと全員を集めるんだ！！」

こうして始まったシャドウナイツとの戦い、しかし、それは困難の幕開けでも有った…

第6話 完

第六話 世界の闇（後書き）

如何でしたか？

ではまた早いうちに更新します
では

第七話 仲間（これが聖桜学園の生徒と教師だ！？）（前書き）

一日空いてしまいましたが投稿します

第七話 仲間（これが聖桜学園の生徒と教師だ！？）

一真が倒れてから二時間ぐらい立って居た、当たりは真っ暗になっ
っており、現在は一真と匡正の寮室に全員が集まって居た、

「あの…匡正さん、一真さんは大丈夫なんですか？」

「ああ…何とか命は助かるだろう、けど…髪の色と目の色はもう
二度と戻らないだろうよ」

そう聞いてひとまず安心する一同、それと同時に一つの疑問が浮
かんだ、

「でもよ…あんだけ強い一真がここまでなるなんて、一体どんな
奴を相手したんだ？」

「…それは俺から話そう、広秋よ…」

そう言いながら上半身をベットから起こす一真、彼の髪の色は完
全に銀色になり、瞳の色はコバルトブルーになって居た、

「一真さん…生きてたんですね…」

「ああ…何とかな、それより、全員に聞きたい、 覚悟を決めて
くれ」

一真の一言に一瞬にして真剣な顔付きに変わる一同、そして…

「当たり前だ（です）」

「…分かった、話すよ、全てを…」

そして今まで有った事を話す一真、自分の力の正体や佳葵の事、そして、シャドウナイツの事…

「…そうでしたか、一真さんには鬼の血が流れて居るんですね…」

「うん？」

今の言葉にはおかしくなかったか、彩井よ…」

「…私も変わった血の持ち主ですから…」

「…美夜には吸血鬼の血が流れてるんだよ、匡正」

一真の一言に辺りは静まり返って居る、その沈黙を破ったのは詩乃で有った、

「…でも一真と美夜は私達の友人であり、幼馴染みだよ…」

「ありがとう、詩乃、でだな、これからの事だが…」

そう、これからの戦いをどうするかについて話し合いをしなければならぬのである、

「…奴等には現代の武器や能力は全く通用しなかった、しかし、俺の力…つまり、鬼の血…鬼の力はダメージを受ける、と言うが、多分の域だな…」

「多分って、一真にしてはあいまいな答えだね…」

「ああ…なんせ次元の狭間にほおりこんだから分かん」

一真がそう言いつた瞬間、信じられるかと言う顔をする広秋と晃平、それを見た楓が…

「お前らには友人を信用する事が出来ないのか？」

「いや…信用して無い訳じゃ無いが…実際に見て無いから何とも言えないな…」

「そうそう、俺達はその現場に居合わせなかった訳だし…」

「最低だな、お前ら」

楓の一言に完全にノックアウトになる二人、それを見た一真が…

「さて、傷付けて倒れて居る二人は置いて…これで俺の話は終了だ、何か意見やら何か有る？」

「一真よ…一つ言いたいんだが…」

「何だ？」

匡正よ…」

一真の問い掛けに対して答える匡正、

「それでだな、重要な事だ」

「何だよ、勿体ぶらないで言えよ」

「校長が呼んでたぞ」

一瞬の間か開いた、そして…

「…なあ、匡正よ…そう言うのって起きてすぐと言いつぐき事じゃあ無いのか？」

「そうなのか？」

「そうだよ！！！！！」

そう言い残して走り出す一真、しかし…

「待て、一真！！！！」

そっちは校長室じゃあ無い、そっちは…」

匡正が全てを言い終える前に女子生徒の悲鳴が聞こえた、そう、一真の向かったのは女子寮に鬼の形相をして突っ込んで行ってしまったのである、

「…女子寮だって言い損ねた…」

「先に言えよ！！！！！」

ちなみに一真に向けて様々な物が飛んで来て居る、筆箱に鉛筆、空き缶に鉛筆削り、野球ボールにソフトボール、ナイフに包丁、バット…

「色々飛んで来るな…一真よ」

「お前のせい…ウボバア!!!!!!」

謎の奇声を上げながら倒れる一真、その上には…

「…銅像ですね、てか、大丈夫ですか、一真さん、死んでは駄目です!!!!!!」

「銅像だな…」

「アハハ〜よっぽど恨まれてるだね、一真」

美夜は凄いい勢いで心配し、匡正は冷静に判断し、晃平にいたっては大笑をしている、そんな晃平に災難が…

「ウガアアア!!!!!!」

誰だ、銅像を投げた奴は!!!!!!」

勢い良く銅像をぶっ飛ばす一真、ちなみに、晃平は運悪く銅像に潰されてしまったのである、それはさておき、銅像を投げた犯人が判明した、

「それは私だよ、錬条君」

「ああ？」

って、その声は…」

そこには髪の色が夜空の様に黒い少女が立って居た、

「…何だ？」

今の失礼な反応は、そんなに私が嫌いか？
錬条君」

「そんなつもりは無いが…さすがに銅像は無しだろ、高坂よ…」

「はっはっはっ、軽い冗談じゃあないか、錬条君」

そう言いながら豪快に笑う高坂、それを見た一真が…

「はあ…もう良いよ、いつもの事だし…」

「何だ…つまらないな、まあそれは良いとして、校長が呼んでたぞ、何かやらかしたのか？」

「いや…ま、色々とな…」

「まあ、深くは聞かない、と言うか、校長から聞いて居るしな…」

高坂の独り言を聞き取れなかった、

「うん？」

何か言ったか、高坂よ…」

「いや…気にしないでくれたまえ、それより校長室に行くんだろ？
錬条君」

「ああ…てか、何で知ってるんだ？」

「私も呼び出されたからだ」

「さいですか…」

こうして校長室に向かう一真と高坂、そして…

「失礼します、三年二組の錬条 一真です」

「同じく三年二組の高坂 初音です」

「入って来なさい」

校長室から老人の声が聞こえた、中に入って始めに気付いたのは、純粋な和室で有る事、畳に卓袱台掛軸ちゃぶだい かけじくそして、小太刀が二本と太刀が二本と上下に飾られた物まである、その真ん中に七十代ぐらいの老人が座って居た、

「良く来たね、まあ座りたまえ、錬条君に高坂君」

「では…」

そう言いながら正座する二人、先に話しを切り出したのはやはり校長である、

「さて…話は聞いて居るかもしれないんじゃが…錬条君、説明を…と言う前に…おい、入って来てくれ、斉城君」

「呼びましたか？

組長」

冷静な声とは裏腹に壁を切断して入って来たのは二十代後半の男の人で有った、

「…錬条に高坂じゃあ無いか、何でここにお前らが居るんだ？」

「先生こそ何でここに居るんですか？」

「俺は組長に呼ばれて来たんだが…」

「俺は校長じゃ、それと斉城君、君の今月の給料は無しじゃ」

それを聞いた剣道部顧問の（いつも仕込み杖である木刀を持ち歩いて居る）斉城 哲は…

「そんな…組長、俺を殺す気ですか！…！」

「ならば今度から普通に入って来なさい、後、俺は校長じゃ」

「あの…話を戻したいんですけど…良いですか？」

「ああ、構わんよ、錬条君」

咳払いと共に現在、置かれて居る状況を話した、そして…

「なるほど…てか、かなり面白そうな事に首を突っ込んでる様子じゃないか」

「あの…もしもし？」

斉城先生、何かうれしんですか？
命を掛けた戦いですよ？」

「良じゃあないか、命を懸ける…最高のギャンブルじゃあないか

「!!」

その話を聞いた一真と高坂が凄い勢いで引いて行くのが分かる、それを見た斉城が…

「何だお前ら、そんなに距離を置く必要は無いだろ？」

「いえ…ただ単に阿呆らしい発言に飽きただけです」

「そうなのか？」

「そうなんです…」

そんな事を話して居ると校長が…

「え〜ゴホン、話を戻して良いですかね？」

「すみません、校長…続けて下さい」

「では一つ聞くが…錬条君は今、鬼の力を発動させられるのかね？」

「…多分使えないと思います、てか、暴走するのが落ちかと思いません」

そう言いながら方術陣の彫り込まれた腕を触って居る一真、それを見た校長が…

「ほっほっほっ…まあ騙されたと思って発動させてみたまえ、なに、暴走したら高坂君が何とかするじゃろ」

「はっはっはっ、安心して発動させたまえ、なに…暴走したらきちんと仕留めて殺るからな…」

不気味な笑みを浮かべながら一振りの小太刀を鞘から抜き構えて居る高坂、それを見た一真が…

「…もちろん峰撃ちだよな？」

「…いや、事と次第によっては斬らねばならないな…」

「なるべくなら御免被りたいな…おい」

「まあ、まずは力を解放してみたまえ、でないとなんの進展も無いからな…」

高坂に言われるがままに力を抜いて無の境地に持って行く一真、

「どうなつても知らんぞ…」

一真はその一言共に髪の色が銀色から青色に変わって行く、

「ぐっ…ヤバイ、暴走しそうだ…」

「落ち着きたまえ、焦っては駄目だ、完全に暴走してしまうぞ！」

「わ、分かった…」

それから数秒後、完全に髪の色が青色に変わって居た、力を制御

したため暴走する事無く無事、覚醒終了した、

「…ふう、何とか暴走せずに力の解放が出来た」

「ほっほっほっ、当然じゃ、高坂君も覚醒が使えるんじゃないからな
…」

「あの…校長、覚醒って何ですか？」

「そうじゃな…そろそろ教えても良いじゃろ、この学校の実体を
…」

校長のその一言に反応する一同、そして…

「さて…話すとするかの、何故この学校には君達みたいな特殊な
力と血を持った生徒が多いかじゃが…それはある組織と戦うために
必要な力じゃ」

「ある組織？」

「…世界の敵と共に世界の闇…ワールド エンド ソサイエティ
ー（世界を終らす境界）じゃ…」

「ワールド エンド ソサイエティ？
そんな組織名は聞いた事は無いですね…」

一真の疑問の投げ掛けに溜め息を漏らす校長、そして次の言葉を
発した瞬間、一真の顔付きが変わった、

「…では、この名前に聞き覚えは無いかね、鍊条君」

「どの様な組織名ですか？」

「…実働部隊（紅蓮の騎士団）、彼等が通った後は血の海になるとか言っ噂じゃよ…」

「紅蓮の騎士団…だと？」

「奴等は生きて居たのか!？」

「勢い良く立ち上がる一真、それを見て居た高坂が…」

「落ち着きたまえ錬条君、君の過去に何があつたかは知らんが…怒りに身を任せては駄目だ」

「分かっている…だが、奴等だけは許せないんだ!!」

「君の気持ちも分からんでも無いが…とりあえず落ち着きたまえ錬条君、と言うか、先程気になる事を言っ居たな…奴等が生きて居ると言っのはどう言っ事だ？」

「…昔、俺達が滅した宗教集団だ…美夜を拉致して行つた奴等だから、ぶち壊した」

「一真の短縮した話を聞いて驚きを隠せない高坂、そして立ち上がりドアの方へ歩いて行く一真、

「待ちたまえ錬条君、何処に行くつもりじゃ？」

「奴等を再起不能にして来ます」

「今彼らが何処に居るのかも分からないのかね？」

「…それは」

飛び出す寸前の一真を何とか止めた校長は、溜め息を吐きながら断言した、

「確かに鍊条君の気持ちも分からないでも無いかね…今、何をしなければならぬかを考えてみてくれないかね？」

「…何が言いたいんですか？」

「つまりじゃ…君には戦ってもらわねばならん、相沢君の護衛をしなければいけないからじゃ…」

「佳葵の？」

「何ですか、校長」

当然の如く疑問を持つ一同、少しためらった後、校長が…

「…今回シャドウナイツが目をつけたのは武神の力を持つ相沢君なんじゃ、しかし、奴等と対等に戦えるのは、君達と進藤君達ぐらいなんじゃよ…」

「ちょっと待ってください、何で匡正達まで巻き込まなければならぬんですか？」

「彼らも力を使えるからじゃよ…」

それを聞いて瞬間、完全に言葉を失った一真、しかし、その沈黙

を破ったのは、駆け込んで来た教員の一言で有った、

「校長先生、大変です!!?」

「なんじゃ、騒々しい…」

「奴等が…シャドウナイツが侵入して来ました!!!」

「何じゃと!?!?!?!」

校長が反応する前に反応する一真、それを見た校長が…

「待ちたまえ錬条君、戦うのは良いがこれを持って行きたまえ」

そう言いながら飾って居た刀を投げて来た、ちなみに、きちんと受け取る一真、

「校長、これは…?」

「鬼刀正宗きとうまほうねじゃ…」

「正宗って…国宝級の刀じゃあ無いですか!!」

「まあ、気にせずに行きたまえ」

校長の言葉は気にせずに行く一真達、果して彼らの行く先になにが待ち受けているのか…

第七話 完

第七話 仲間（これが聖桜学園の生徒と教師だ！？）（後書き）

如何でしたか？

次はすぐ更新する予定です

第八話 ドラゴン退治？（なぜにドラゴン？）（前書き）

昨日投稿しようしようとして間違えて消してしまったので更新が遅れました。

誠に申し訳ございません。

ではごんご

第八話 ドラゴン退治？（なぜにドラゴン？）

一真達は走って居た、その間にポケットから携帯を取り出して匡正に電話をかける一真、

「…もしもし？」

匡正か、俺だ、」

「一真か？」

どうした、息を荒げて？」

「…奴等が攻めて来た」

「何！！！！」

分かった、広秋と俺で今から行く」

そう言っつて携帯の通話を終了しようとした瞬間、美夜により携帯を強奪された、しかも心なしかいつもと雰囲気が違う様に見える、

「…楽しそうな事をやってるみたいね…私も混ぜてよ、一真君」

「うん？」

待て、お前は美夜では無く咲夜ゆいだよな？」

「ピンポン、正解、久し振りだね、一真君」

「…相変わらず騒ぎが好きだな、お前は…」

一真の一言に不満を漏らす咲夜、

「あゝ酷い、実に三年振りなのに、そんな挨拶は無いんじゃないかな？」

「一真君」

「悪かったな、しかし、何で急に美夜と変わったんだ？」

「咲夜よ…」

「うゝとね、美夜が急に倒れたと思ったたら、そのまま寝ちゃって

…」

「あゝ多分いつもの奴だろ…」

「一真が非常に困った顔をして居る、その理由は…」

「そうだね、お姉ちゃんにも困ったもんだね、一真君」

「そう言っなって、咲夜…普段はお前が眠ってるんだから…」

「えへへ…そうだね、と言っ訳で、しばらくは私がお姉ちゃんの変わりに戦うんでよろしくね、一真君」

「ああ、すぐに来てくれ」

「それじゃ、と言っ残して通話を切る咲夜、その一部始終を聞いて居た高坂と斉城が…」

「…一つ尋ねたいんだが、美夜君と咲夜君は強いのか？」

「錬条君」

「俺も気になるな…どうなんだ？
錬条君」

「…美夜と咲夜は正直言って最強だな、あいつらの武器はナイフと短刀で何万本も取り出す事が出来るし、何より能力が反則的だな…」

「ほう…それはどのような能力だね？
錬条君」

高坂の問い掛けに答える事にした一真、そして…

「時自体を自在に操る能力だ…」

「時と言うと…あの時間とかの奴か？」

「そうだな…正確には、この世に存在する時間…つまり、今や過去を行ききすら出来ると言う事だ」

「つまり…この世に存在する時を操ると言う事だな？
錬条君」

そう言われて頷く一真、そして…

「さて…説明が終わった所で、全員集合した訳だ」と言う訳で、いつものメンバー＋ が集合した、

「一真よ…その二人は誰だ？」

「あ…そうだな、紹介するよ、今回の事態の助っ人として来た…」

「斉城だ、呼び捨てでも構わんが、せめて先生と呼べ」

「高坂 初音だ、好きに呼んでくれたまえ、諸君」

そうして自己紹介が終了した時点で有る事に気付く、

「…一つ思ったんだか…何か呻き声みたいなのが聞こえないか？」

「呻き声と言つより雄叫び？」

「いや…どちらかと言つと、喉なり？」

「（なるほど）な」

全員が納得する結果を出した一真達、しかし、新たなる疑問が生まれた、

「そう言やあ、誰がこんな喉ならしをしてるんだ？」

「おい、晃平、変な喉唸りすんなよ」

「え？」

俺は何もやって無いよ？」

「嘘を付くな、いつもの悪ふざけならばすぐに止める、晃平」

一真と広秋に攻め立てられて泣きそうな顔をしている晃平、しかし、晃平に掛けられ疑いはすぐに晴れた、そう、喉ならしをして犯

人が出て来た、

「…なあ、今思ったんだが…何か生暖かく無いか？」

「…確かに、しかも…何か血生臭いし…」

「何か後ろの方から視線&殺気を感じるだが…」

そして、一真達は恐る恐る後ろを向くとそこには…

「…おいおい、冗談じゃあ無い…!!！」

「おとぎ話かよ…別名メルヘンティックとも言つ」

「冷静に解説してる場合じゃあ無い…とにかく逃げろぞ…!!！」

一真の一言に反応して一斉に逃げ出す全員、その理由は…

「グオオオオオ!!!!!!!!！」

そう、そこに居たのは超特大のトカゲ…では無く、ドラゴンがそこに立ちふさがって居た、

逃げる事数分、一真達は校舎裏に居た、

「はあ…はあ…どうしろ言っねん…!!!!！」

「そりゃあ、倒すしか無いんじゃないのか？」

「倒すったって…どうやって？」

「そうだな…」

一真以外の男性陣が考え込んで居る、一方一真は、

「…そうか、英雄伝説だ!!!」

「はい？」

まさか…遂に逝かれたか、頭が…」

「違う、竜殺しの英雄…不死身の騎士、ジークフリードだよ」

「ああ…あの不死身の変人の事だね、一真君」

一真の発想に驚く咲夜、しかし、他のメンバーは分かって居ない様子である、

「さて…ではここで問題だ、不死身の騎士、ジークフリードはどうやって邪竜を倒したでしょう」

「分かった!!!!!!」

「はい、楓」

「核兵器を使った」

楓の発想に驚く一真、と言うより、馬鹿げた発想に呆れ返って居た、

「あのな、神話の時代にそんなの有る訳無いだろ…」

「そうだけ、有るとしたら…やはりビーム兵器だろ」

「なるほど…それもそうだね…」

「有るか阿呆共!!!」

さすがに阿呆過ぎて話にならないと言つ顔をする一真、

「そうだけ!!!」

有るとしたらガ○ダムだろ!!!」

「有るか!!!」

何か？

核反応を起して動く白い悪魔か？

フ○ダムか？」

「違うのか？」

「今の時代でも無理だろうが!!!」

完全にツツコミ役になって居る一真、それを見て居た匡正が…

「そうだけ、せめて槍にしとけ、神槍グングニルぐらいにな」

「惜しいな、実際には剣でやったんだ、バルムンクの剣…ニーベルゲンの歌で有名だな…」

「でも、普通に神話に出て来るドラゴンは鱗が堅過ぎて剣が折れるんじゃないか？」

「その通り、でもな、いくらドラゴンとは言えど弱点が有る」

そう言われてもいまいちピンと来ない一同、しかし、一真は話を続ける、

「…まあ、吸血鬼の様に日に弱いとかニンニクが駄目とか十字架が怖いとか海は渡れないとか言う物理的な弱点では無く、どちらかと言うと鎧の弱点に近いな…」

「隙間が有るとか？」

「惜しい、隙間では無い」

「分かった、鱗の何処かが薄いんだ」

その答えが出た瞬間、一真は安堵の溜め息を漏らした、

「そうだ、正確には逆鱗ぎやくりんと呼ばれて居る物だ、そこを付けば一瞬でドラゴンを倒せるらしい…」

「そうなのか…ならば、それを見つけたら…」

「そう。それを見つければ俺達の勝ちだ、他のジャドウナイツは居ないみたいだしな…」

「だな…しかし、誰が探すよ？」

目が悪かったら分からんだろう？」

匡正の一言に考え込む一真達、その時…

「ボクが行くよ一真、目ならボクが一番良いはずだし…」

「分かった、任せませ、楓」

「分かった、でもね、時間が掛かると思う…」

「そうだな…三分から五分で何とかならないか？」

一真が言う五分とは、全員が全力で稼げる最高時間なので有る、

「…十分有ればボク一人で何とか探せるけど…その時間だと、皆にも協力して貰わないといけないよ？」

「上等だ、うんじゃ、各自見つけ次第俺に電話してくれ」

こうして始まった逆鱗探し、楓はすぐに屋上に上がり、それを確認した一真達はドラゴンの目の前に立ちはだかった、

「さて…始めようじゃあないか、仮装パーティーをな」

そう言いながら鞘から刀を抜く一真、刀心は黒掛かっており、刃自体も黒色になって居る、

「わお…黒いな、おい」

「そうだな…うん？」

鞘に何かのスイッチが…」

鞘に付いて居た出っ張りを押す一真、すると突然、鞘の外側の方から刃が出現した、

「…暗器の類いかな？」

「…多分違うとは思ってか、そう信じたい」

などと愚痴って居る間にドラゴンがすぐ前まで来て居た、

「…なあ、一真？」

「何だ？」

広秋よ…」

「とりあえず…」

逃げるの一言で一斉に散らばる、一真と咲夜は後ろに、匡正と高坂は上に、そして、広秋と斉城は左右に飛んだ、

「咲夜、意味は無いとは思って…試しにナイフを弾丸並の速さで投げてくれ」

「分かった、ところで、速さはライフル弾？
それとも拳銃？」

「試した、ライフル弾並で頼む」

一つ頷いた後、懐から一つのナイフを取り出した、そして上に投げる、当然の事ながら重力があり、落下する筈のだが、時間を止めて居る為空中に止まって居る、そして…

「それじゃあ行くよ、一真君」

そう言っただ中に浮いて居たナイフが咲夜のの手前に来る、そして…

「最大速マツハ1」

咲夜の一言に一瞬にしてマツハ1に達した（ちなみに軽く音速を越えて居ます）、ナイフはまっすぐにドラゴンに向かって飛んで行く、しかし…

「…予想通り傷一つ付かなかったよ、一真君」

「だろうな、よし、次は俺の番な…」

そう言いながら鞘と刀を構える一真、そして…

「どうするの？」

「一真君」

「…あんま使いたくないが…こくせんりゅうしょうけん克閃龍翔剣を使う」

「…まさか、秘剣の三段剣術の事？」

「ああ、だか今回は壹の秘剣しか使わない」

（説明しよう、そつえんしきひけん双焰式秘剣 克閃龍翔剣とは三段階が存在する、一段階目は高速で移動しそのまま貫く勢いで十字架に切裂く壹式、二段階目は壹式に加えさらに蹴りを居れて傷口を開いて相手を重傷にするのが貳式、そして、最後の三式は、高速の斬撃を四ヶ所、腹部・脚部・頭部・腕の四ヶ所である、そこを確実に切り伏せるのが三式である、この三つを組み合わせた技が、克心双焰流

終式 克焰源心滅翔陣、この技は、三段階の全ての利点を生かし、高速の斬撃を四ヶ所に打ち込み、なおかつ、十字架を刻みながら蹴りを入れる荒技である、ちなみに、人に使うと確実に死んでしまうので使用しない、故に秘剣とされて居るのである)

足に力を貯める一真、その理由は…

「ドラゴンの腹部に十字架を描いて来る」

「そんな無茶な、一真君は一般人と変わらないんだから無理だよ
!!--!」

「安心しな、俺にはこいつが有る」

一真はそう言って空間を圧縮して足場を作り出した、

「…こいつを昇って行く」

そう言い残して空間圧縮を昇る一真、そして…

「はあ!!--!」

克閃龍翔剣 壱の太刀」

叫びながらドラゴンの腹部に大きな十字架を描いた筈だった、しかし…

「ちい、腹にまで鱗が有るかよ!!--!」

「一真君、急いでそこから離れた方が良いよ!!--!」

「ちっ、仕方無いか…」

舌打ちをしながら後退する一真、着地と同時に携帯がなる、

「もしもし？」

匡正か？」

「ああ、どうだ？」

そっちは

「やっぱり駄目だな、鱗には傷一つ付かなかったよ、で？
そっちはどうだ？」

傷付けられた又は逆鱗を見つけられたか？」

「残念ながら…残りのメンバーも一緒にいたいだな…」

匡正の報告に舌打ちをする一真、

「くそっ、行動開始から既に六分が立って居る、後残り四分しかないのに…」

「落ち着け、一真、とりあえず…楓からの連絡を待つしかない…」

「ああ…そうだな、見つかったら俺に連絡してくれ」

「分かった、でも、どうやって倒す気だ？」

一真よ…」

匡正の問い掛けに少しのためらいも無くそっかいする一真、

「剣に力を送り込んで、空間転移の技術を利用して、逆鱗を移動させながら切れく」

「可能なのか？」

一真

「…まあ、原理は分かっているから何とかなるだろ」

「ぶつつけ本番かよ…ま、何とかなるだろ…」

などと話して居ると、一真が仕事用に使って居る携帯に着信が入った、ちなみに液晶に出た名前は言うまでも無く楓である、

「…すまん、匡正、楓から通話が入った、切るぜ」

「ああ…武運を祈ってるぜ」

匡正との通話を切りそのまま仕事用の携帯に出た、

「楓か？」

見つけたのか？」

「うん、今から拳銃で逆鱗を撃つから頑張っ見てつけてね」

「了解、この通話を終えて三秒後に撃ち込んでくれ」

「分かったよ」

通話を終えてから三秒後、屋上の貯水タンクの上に立つ楓を確認出来た次の瞬間、手に持って居た二丁の拳銃が火を吹いた、

「お、始まつたみたいだよ、一真君」

「そうみたいだな…そこか!!!」

弾丸がどこに当たったか判明した次の瞬間、空間圧縮の階段を作り掛け上がる一真、そして…

「見つけた…首筋の近くだな…」

「一真君、なるべく素早く殺らないと危ないよ!!」

「了解した」

一真が一つ返事をすると同時に正宗にオーラを注ぎながら上から落下する、そして…

「克心双焰流…元星げんせいてんいけん転移剣」

(説明しよう、元星転移剣とは、一真の空間を操る能力を全開に引き出し、それを使い物質を移動させると同時に、この世から消滅させる事も可能にして居るのである、全ては一真のさじ加減次第である)

元星転移剣を発動と同時に正宗を逆鱗に突き立てた、予想通り正宗は簡単に突き刺さってくれた、しかし、血の色は普通では無かった、金色をして居るのである、

「すげえな…っと、いかんいかん、行くぜ」

逆鱗に刺さったままの正宗を引きずる感じに移動する一真、背中

の真中心辺りで空間転移を自分に使い地面に見事に着地した、

「ふう…何とか成功したな…」

「グオオオオオ…」

一真が正宗を鞘に直すと同時に天高くに昇って行くドラゴン、

「何とかなつた様だな、錬条君」

「さすがだぜ、一真よ…」

「これにて任務は完了だな…うんじゃ、俺は校長に報告しに行つて来るな…」

続々と散って居たみんなが集まり初めて居た、ちなみに斉城は校長に報告に行つて居る、

「お、殺つたみたいだね、一真」

「楓か…殺るの字が違う気がするんだが…まあ良いか…お疲れさん」

「どおって事は無いよ…」

一難さつて気が少し揺るまったのもあり、その非現実的な光景に非常に驚いた、

「おい…こいつは不味いぜ…人が降つて来る…!!」

「不味い…このままだと本当に死んでしまっぞ!!!」

「ちつ、仕方ない、空間転移を使ってあそこまで飛ぶ」

それと同時に空間転移を使って空中に移動する一真、そのまま落下して来た少女をキャッチに成功した、

「ふう…何とか間に合ったか…」

「…一真君、この子…命が危ないよ」

「何？」

「ほら…背中から大量の血が…」

そう言われて少女の背中を触って見る一真、そして、有る事に気付いた、

「…なんだよ、この刀の切り傷見たいなのは…」

「分からない…でも、早く治さないと死んでしまうのでは無いか？
錬条君」

「つと、そうだったな、咲夜、リバータイム（戻る時間）を彼女に」

「了解、でも、傷が入る前の状況にしか戻せないよ？

一真君」

リバータイムを始めながらそんな事を言う咲夜、すると一真が…

「傷口さえ完全にふさがってたら後は俺のヒーalfォース（癒しの力）で何とかする」

こうして三十分後、彼女の命に別状は無くなったのである、

「…ふう、何とか命に別状の無い所まで持ち直したぞ…」

「お疲れ様、でも、この子はどうしようか？」

「そうだな…とりあえず、俺と匡正の部屋に運ぶ事にするか…」

「錬条君」

「な、なんだよ…」

激しくニヤけながら一真を見て居る高坂、そして…

「空から降って来た少女を介抱と評して…ヤっちゃうのか？」

「やるかボケ！！！！」

てかむしろ死ね！！！！」

「酷い言い様だな、冗談では無いか」

「あんたのは冗談には聞こえんのじゃい！！！！」

ほぼ半ギレ気味の一真は普段吐かない様な言葉を吐く事が判明した、

「で、どうすだよ、一真」

「…最初の計画通り俺らの寮の部屋へ連れて行く、異論は無いな、ついでに反論又は変な意見は無いな？」

いつにも増して敵つい顔付きになる一真、それに恐怖を覚える一同、

「では連れて行く、一応何か有るか分からないから男陣が代わりに番こに見張りを立てる…」

そう言いながら少女をお姫様抱っこして移動を始める一真、その後を追う一同、それから三時間後…

「…交替の時間ですよ、一真さん…」

「ああ…そうだな…」

「…どうしたんですか？」

一真さん

「咲夜…じゃなくて、美夜か…」

いつの間にか咲夜から美夜に代わって居た、

「…いつまで代われるんだ？」

「あまり長くは代われないんです、最低でも後一週間は寝ないと行けないんですけど…」

「そうか…俺に気にしないで休んでろ…」

「…本当に何か有ったんですか？」

いつにも増して暗い表情を浮かべる一真、それを心配そうに見つめる美夜、

「…なあ、美夜、彼女を見て居て…小さい頃の自分を見て居る様に思えた…」

「一真さんは空から降って来たんですか？」

「違う…俺は…生まれて来てはならない子供なんだよ…」

一真が語り始めたのは誰にも話した事の無い過去で有った、そして、少女の正体とは一体…

第8話 完

第八話 ドラゴン退治？（なぜにドラゴン？）（後書き）

如何でしたか？

これからは注意して早めに投稿しようと思いますので…ではまた

〓 〓 (ー・)

第九話 語られた過去 く月明かりの元でく（前書き）

昨日は仕事が忙しかったので投稿できませんでした、

取りあえず投稿します

第九話 語られた過去 く月明かりの元で

空から降って来た少女を見て過去の記憶が蘇って来たのである、

「話してくれませんか？」

「真さん……」

「ああ……だがその前に……出て来たらどうだ？」

佳葵よ……」

「え……？」

美夜が驚いた、男子寮と女子寮は基本的に異性侵入禁止なのである、理由は言うまでも無いだろう……

「どうして私が居るって分かったの？」

「……そうだな、強いて言うなら足音かな？」

「……驚いたわ、良く数日しか会って無い私の足音が覚えられたわね……」

「昔の習慣でな……敵の数や持って居る獲物、そして大体の体重と性別が大方では有るが分かるんだ」

戦場で育った一真にとってその環境下に置いて、今、自分の置かれて居る現状と自分の成し遂げ無ければならない事、そして、そこで敵対する者が何人居るかなどの判断を叩き込まれて居るので有る、

「…一真君は辛い人生を送って来たんだね、幼い頃から戦場に立たされて…」

「そこまですら無いよ…それにまだ何も話して無いしな…」

「でも、私は親が殺されてお師匠様に拾われて剣術を習ったけれど、一真君は生まれた時からいなかっただけでしょ？」

「…頼むから勝手に過去を改竄かいざんしないでくれ…」

飽きた表情を浮かべる一真、そして少しずつ語り出した、

「…俺は鬼の姫である母と退魔師である父の間に生まれたハーフなんだよ…」

「やはりそうでしたか…一真さんから感じたオーラは人間の者と少し違って感じたのはやはりそうだったんですね…」

「やつぱりって、美夜さんは聞いて無いの？」

一真君に…」

「聞いて居ませんよ？」

「…」
と言うか、話したくも無い事をむやみに聞き出したくは無いのですし

基本的に一真の過去を語りたがらない、と言うか絶対に過去を語るうとしない、それは一真が友人にすら語るうとしないので皆も聞かない、

「まあ、あんまり楽しい過去じゃあ無いし…ただ、昔、一人だけ

話した奴が居たんだ、仲が良かった奴だったけど…でもそいつは話を聞いて最後に一言だ、(この人殺し、人でなし、犯罪者)だな…」

「…本当に何が有ったの？」

一真君、そこまで罵られる理由が分からない…」

「そうですよ…私なんて180歳の化け物ですよ…一真さん」

「二人の過去を知って、俺の過去を話さないのは不公平だしな…」

こうして遠回しになって居た一真の過去が明らかになるので有った、

「あれは今から十五年の冬、丁度クリスマスで雪が降ってたな…」

「ホワイトクリスマスね…懐かしいな、家族でパーティーしたな…」

…」

「あの夜は父さんと母さんと俺の初めての外食の帰りだった…」

「素敵な光景ですね…」

とどこどころ会話が入って居るが特に気にしないで話しを進めて居る一真、

「…その時に事件が起った…」

「事件って…まさか…」

「…結構有名な事件だ、夫婦の変死体が都心の真ん中で発見されたんだ…」

「…あの内臓器官が丸ごと無くなって居たと言う…?」

美夜が意外そうな顔をしている、それを見た一真が…

「良く知ってるな、てか、組織に掴まってたんじゃ無いのか?」

「…あれは掴まる一年前だったんですよ」

「そうだったのか…」

「話が横道に反れて居るんだけど…で?

何でその夫婦の変死体に一真君が関係して居るの?」

「ずれて居たか…でだ…両親の内臓を消したのは俺だ…暴走した俺の力を封印するために立ちふさがった二人を俺が殺したんだ」

一真の一言に驚いて居る二人、それを見た一真が…

「…瀕死の二人は最後の力をふり絞って俺の力を封印した…」

「……………」

「だから俺はこの腕に刻まれた方術陣は親の魂の宿った物だと信じて居る…」

「……………うそ」

「…ふっ、軽蔑したければ軽蔑してくれて構わん、人殺しと罵りたければ罵ってくれ、人でなしと言いたければ言ってくれて構わん」

悲しげに笑う一真を見て居た二人には笑える状態では無かった、

「……んで」

「うん？」

「何で…何でそんなに悲しい過去を笑いながら語れるの？」

「おかしいよ、一真君は一切悲しくないの!？」

「そんなのおかしいよ!!!」

「なら……泣いて喚いたら俺の罪は消えるのかよ…悲しんで父さんと母さんが生き返るのかよ!!!」

「……それは」

いつにも無く怒って居る一真の憤りにさすがの二人も驚きと気負いで言い返せないで居た、

「……謝って二人が生き返るなら謝る、死んで詫びると言われたら死んでやる……」

「……一真さんの馬鹿!!!!!」

美夜のビンタをもろに受ける一真、それを見て居た佳葵がビンタを張ったあとに後ろから押さえ込んだ、

「お…落ち着いて美夜さん」

「離して下さい佳葵さん、こんな事…簡単に死ぬ何て言う一真さんなんか大っ嫌いです!!!!」

「貴女の気持ちも分からないでも無いけど…一真君の気持ちも考えて上げて…一番辛いのは一真君だと思うし…」

「…構わないよ、元はと言えば俺がいけないんだからな…それに、親を殺したさいに俺なんて消えてしまえば良いと…生まれるべきでは無かったと考えてしまっただ…」

「…私には分かるな、その気持ち…私も目の前で両親が殺されて、妹が連れて行かれた時にどうして私一人置いて行ったのか、何故生きて居るのかって考えた。

でも、私達は生きて居る…これって何かしなければならぬって事じゃあ無いのかな？」

「…一真さん、私と約束しましたよね？」

決して私を置いて行かないって…信じてますから、だから簡単に死ぬなんて言わないで下さいね…」

美夜はそう言って後ろを向いてしまった、多分彼女は泣いて居るであろう…そう感じとった一真が…

「…すまなかつたな、美夜…」

「…どこに行くんですか？」

「一真さん…」

「…少し散歩がてら飲み物を飲んでく来る…本当にすまなかつた…」

たな、二人とも……」

「あ……一真君」

佳葵が呼び止めようとしたがすでに外に出て居た、

「なにが言いたかったんですか？」

「いえ……ただ、すでに消灯時間は過ぎて居るから外出は許さない
って言おうと思っただけ……」

「……仕事熱心なんですね、佳葵さんは……」

「あら……そんな事は無いわよ、ただ規則は守らないとね……」

(そう言うのを仕事熱心って言うんですよ、佳葵さん)

佳葵が意外にも天然で抜けて居るところが有る事を思い知った
美夜で有った。

一方その頃一真は、寮から少し離れた自販機のコーナーに居た、

「ふう……何か今日一日で半年分の力を使った気分だよ……」

紙コップに入って居るコーヒーを一口飲んでそんな事を愚痴って
居た、そして、有る事に気付いた、

「……？」

彼女は確か……俺達が助けたはずの……」

そう、そこには一真達が助けた少女がそこに居た、

「……何を探して居るんだ？」

不審に思った一真は彼女に近付き話し掛けて見た、

「ちよつとそこの君、もう外出時間はとっくに過ぎてるぞ」

「…貴方こそ、人の事言えないんじゃないの？」

「確かに、でもな…この生徒ですらない君がここいらをつろついていたら捕まるよ？」

「なら…貴方を消し去るまで…」

「へ？」

一真がいきなり間抜けな声を出した次の瞬間には少女は一真の目の前に来て居た、そして懐から有る物を取り出した、

「……記憶が飛ぶのが先か死ぬのが先か、前者を祈る事だね…」

そう、少女が懐から取り出したのはトンファーである、

「…それは確実にどちらか選ばないと行けないのか？」

「選ばなくても良いのよ、なる様にしかならないからな…ね…！」

「！」

話終える前に攻撃を仕掛けて来る少女、狙うわ一真の顎、普通の人なら避けきれずにすでに碎けて居てもおかしく無い速さである、しかし、これはあくまで常人の話である、能力の使える一真にとつてそれをかわすのは容易である、

「おっと…危ないな、女の子がそんな危険な物を振り回すもんじやあ無い!!」

「知らないね…もう前者を諦めた方が良いよ!？」

「残念ながらどちらも無いから安心しな!!!!」

全力で攻撃を躲し続ける一真、しかし、途中で腹部に蹴りを思いつきり受ける、

「くぶっ……………」

「ふふん、痛いだろ？」

今樂にして上げるよ!!!!」

トドメと言わんばかりにトンファーを回しながら一真に迫って来る少女、痛みで動けない一真は避ける事が出来ない…しかし、確実に当たるはずのトンファーは彼をかすりもしたかった、

「…………人に向けてそんな物を降るなんてどんな見だね？」

「…………何なの貴女は、そんなに彼を苛めたいのか？」

「いや、むしろ逆だな…今君がしようとしている事はただの殺しだ、それに…彼にはまだ生きてもらわねば困るのでな…」

「なら…まずは君から…消えてもらおうよ!!!」

再びトンファーを降る少女、しかし、途中で割っては入って来た高坂も小太刀で応戦する、すると…

「………克心流 双翔打そうしようだ」

（説明しよう、双翔打とは、腹部に掌打てんていを打ち込み、そこにさらにもう一度、掌打を同じ場所に打ち込む技である。）

双翔打を受けた少女はもろに喰ったため吹き飛んで居た、

「もう立ち上がって大丈夫なのか？」

錬糸君

「あんまりよくは無いな、内臓が逝かれるかと思っただよ…」

そう言いながら血を吐き出す一真、意外にもそこまで苦しそうな顔をして居ない、

「頑丈だな、君は…」

「そりゃどうも…しかし、彼女はもう復活してるぞ」

「確かに…しかも、君以上に頑丈な様だな…」

「しかも先程以上に嬉々として走って来てるし…」

半ば呆れ気味にそんな事を言う一真、しかし、彼女は止まる訳で

も無いのだ、

「ちっ…仕方無い、能力を解放して…」

「待ちたまえ…私が行こう…」

高坂はそう言いながら力を開放した、それと同時に真夜中の様に黒かった髪が一瞬にして紅蓮に燃える様な朱色に変わった、

「……高坂も何かの能力者だったのか？」

「私は…天照大神の血を引き継ぐ者だからな…まあ、操れるのは温度と炎ぐらいしか無いがな…」

「俺や美夜以外にも居たのか…」

「まあ、能力者は十数人居るらしいがな…それと西江君も能力者らしいな…」

「やはりか…まあ、薄々気付いては居たが…」

一真と高坂が会話して居る間に至近距離まで詰め寄られて居る二人、しかし…

「ふっ、私を見縊^{みかぎ}ら無いで貰いたい物だな…」

左手に炎を溜める高坂、そして、その手を少女の腹部で爆発させる、

「……燃え尽きたまえ」

「……かなりエゲツないな……」

「真の反応はいたって普通のはずなのに今は普通に見えないのところが凄い……」

「ふう……死ぬかと思った……」

「……何？」

「確かに焼き付くしたはずなのに……」

「化け物かよ……うん？」

「破れた服の隙間から……」

「どうした？」

「素肌が綺麗でなおかつ臍へそが見えてラッキーと思いつつながらもやはり美夜君か咲夜君の方が良く、見たら萌え〜と叫びながら校内を走り回ったそんな顔は……」

「そんな事するか!!!」

「てか、むしろそんな事したら自殺するわ!!!」

「ふむ……やってくれたら楽しいもの……で？」

「実際には何が見えたのだね？」

「冗談が通じない場面のはずなのに冗談を言ってノリツッコミに発展する辺りが凄い……」

「……鱗だよ」

「鱗と言つとあの鱗かね？」

錬糸君

「その通りだ、つまり彼女は……」

最後まで一真が話終える前に彼女は突撃して来て一真の顔面に目掛けてトンファーを降り下ろした、直撃を防ぐために右に避け用とした……しかし、完全に避け切れずに左目に直撃した、

「っ！……！」

「大丈夫か……！」

錬糸君

「……チツ……（完全に失明してるな……）」

左手で左目を隠す感じの体制を取る一真、その隙間から大量の血が出て居る……

「まさか……失明したのか、錬糸君」

「……ああ、完全にな」

「そうか……分かった、彼女は私が何とかしよう……」

「ふふん？」

彼はそこまで強くなかったけど、果して貴女は我を満足させられるかな？」

「舐められた物だな、ならば……見せてやろう……」

彼女の燃える様な瞳がさらに赤く染まって行く、そして…

「…我が剣よ、全てを焼尽くす刃とかせ…私は君を許さない、この炎剣 フランベルジュで焼尽くしてやる…」

「ふふん？」

遂に本気を出す訳かい？
なら、我も本気で行くよ」

高坂の持つて居た小太刀は呪文によって炎の剣と化し、少女の武器もトンファーから黒色の槍に変わって居た、どうやら少女も能力を発動させた様だ、

「君の能力を知って居て我の能力を知らないのは不公平だな…教えておこう、一言で言くとベクトルだな…」

「ベクトル…つまり、力に関する能力か…厄介だな…しかし、錬糸君の無念は晴らさしてもらおうぞ」

「……いや、俺は生きて居るから……」

「おや、休んで無くて良いのか？」

「まあ…な、方術で止血はした、でも…完全に失明したからタイムリバーズですら治らないだろうな…」

一真が言っただけ居る事が理解出来ない高坂、普通に聞いたら治りそうに感じなんだが、それは出来ないもので有る、

「……能力による物では無い、一種の呪いだな……そうだろ？
君」

「ご名卒、でも…我にも解けないぞ、それは龍の呪い…聖帝ジークフリードでないと解くのは無理だから…」

「やはり昼間戦った龍だったか…」

「とりあえず休んでいたまえ、後は私がやる」

「素直にそうさせて貰う、今は武器も無いしな…」

「うむ、素直に言う事を聞く人は好きだよ」

「そりゃどうも」

近くの壁にもたれ掛かりずり落ちる感じに倒れる、

(情けないな…こんな事でへばるなんて、やはり戦場を離れてから時間が立って居るからな…鍛練は欠かさずに行っていたんだが…実戦をあまりしないからか…)

そんな事を考えて居ると正面から二人の人影が現れた、

(…チィ、新手か？)

新手ならやるしか…)

「うん？」

おい一真、大丈夫なのか？」

「一真…凄い血の量…どこか怪我してるの？」

「ああ…ちよつとな」

そう言いながら目を押さえて居た左手を取る一真、その目を見た二人の表情が一転した、

「…一真よ、その目を誰が潰したんだ？」

そいつはまだ居るのか？
居るんなら…殺す」

「落ち着け隆司、アイツを殺したところで何が変わる訳でも…つて、居ないし…」

「一真…ごめん、私も今回ばかりは我慢は出来ない…」

詩乃と隆司は一真の怪我を見た瞬間に少女を敵と認識してしまっただのである、

（くそ…厄介な事になったぞ、あの二人の乱入は正直予想外だ、正直言つてあの二人を止めないと…学校が崩壊する！！
仕方ないな…）

一真は能力を発動させ、空間の歪みに手を入れる、そして…

「…有った」

彼が取り出したのは何と…

「これさえあれば痒いところに手が届く！！！！」

天高々と掲げたのは孫の手である、

「って、阿呆な事してる場合じゃあねえよ！！！！」

そして、孫の手を投げ捨てて、再度空間を歪めて、今度こそ部屋に置いて有った刀を取り出した、

「よし…後は高坂と連携してあの子を何とかするだけだな…」

こうして歩き出す一真、どうも高坂達は戦闘しながら移動したらっし、

(チィ…あいつらどんな戦いしたらこんなに移動出来るんだよ)

彼女達は最初は自販機の前、次に校舎前、最後にグラウンドまで移動して居たのである、

「おい、隆司と詩乃、お前らは下がってる！！！！」

「一真か…止めてくれるな、こいつだけは…くぼあ！！！！！！」

「……さつさと下がりがれこの阿呆が……」

隆司を蹴り飛ばした一真、半ギレ状態なので完全になりふりなんて考えて居ない様だ、

「……詩乃も大人しく下がっててくれ……」

「…分かった」

素直に従った詩乃には何もなかった、と言うより彼は基本的には女性に対して暴力を振るったりはしないのである、

「…さて、高坂よ、さつさと彼女を静かにさせるぞ」

「了解した、して策は有るのかね？」

「一応な」

「ほう…では聞こうか？」

錬条君」

「簡単な事だ…彼女の獲物を弾き飛ばしてそのまま気絶させる、そしてそのまま彼女を捕縛する」

「ふっ、軽く言ってくれるな、錬条君」

不敵な笑みを浮かべる高坂、それを見た一真もまた不敵な笑みを浮かべた、

「当たり前だ、これ以上の策は無いからな…」

「はっはっはっ、確かにな、で？」

「どちらが縛り上げるのだね？」

「何で高坂はそう言う言い方しか出来ないんだ？」

「はっはっはっ、気にしたら負けだ」

「 そうなのか？ 」

なあ、本当に気にしたら負けなのか？ 」

「 まあ、余り気にしない事だな 」

一真の疑問に対して軽く受け流す高坂、聞いて居た一真は少しシヨックを受けて居る…しかも、何もしていないと言わんばかりの顔付きで有った、

「 …まあ、今回は別段、分の悪い賭けでは無いしな… 」

「 そうだな…よし、行くとしますか 」

「 ああ… 」

こうして一真と高坂は走り出したので有る、果して彼等の運命は如何に… t o b e c o n t i n u e

第9話 完

第九話 語られた過去 〱月明かりの元で〱（後書き）

如何でしたか？

ではまた

第十話 戦いの幕開け くその1く 練糸 一真の権力(前書き)

昨日に引き続き投稿します

ではどうぞ

第十話 戦いの幕開け（その1） 練条 一真の権力

一真達と空から降って来た竜の少女との戦いは激しさをますますばかりで有った。

「チツ…ちょこまかと…この際ここいら一体を消し炭にしてやるうか？」

「止めんか！！」

俺達まで巻き込む気か！！」

「君の能力をフルに活用したら簡単に逃げ切れるだろ？」

練条君」

「あのなあ…」

さすがの俺でも全員は無理だぜ。
せいぜい二人か三人が限界だ」

「なんだ、使えない能力だな…」

「仕方ないだろ…っと」

二人が話して居る間に近づいて来ていた少女のトンファーによる打撃をなんなく避ける一真と高坂。

しかし、それを想定していたのか、少女はすぐに次の攻撃へと移る。

「チツ…私の攻撃をこつとも簡単に避けるとは…なかなかどうして

出来るな。

君達」

「お褒めいただき光荣だね…

なら今度は俺から行くぜ！！」

そう言いながら斬撃を繰り出す一真。

しかし、それを華麗に避けながら反撃の機会をうかがう少女。
彼女は一真との攻防のせいで有ることを忘れていた。

そうそれは…

「おやおや…私の存在を忘れて二人で楽しそうにイチャつくとは
…お姉さんも混ぜたまえ」

そう高坂で有る。

彼女は手にしていた小太刀（現在はフランヴェルジュになっている）
で少女の腕・首・足・胴体・関節の順番で少女に斬りかかった。

しかし少女はその斬撃を軽々と交わし、避けきれない攻撃はトン
ファーにより捌ききったので有る。

「ほう…この私の斬撃をすべて捌くとは…

私もまだまだ修行が足りんな、はっはっはっ…」

「何、気に病む必要は無いぞ。

我を相手には当然の結果で有るからな」

「ふっ…それはどうかな？」

「何？」

不敵な笑顔を浮かべながら右手を差し出す高坂。

それを見た少女は初音から離れてトンファーを盾にするように構える少女、そんな彼女の行動を見て小さく笑うと高坂はその右手の指を鳴らした。

それと同時に少女が持っていたトンファーが小さな爆発を起こして壊れていったのである。

「なっ…私の父の牙と鱗を加工して作ったトンファーがっ…!!」

「ふむ…やはりそうだったか」

「やはりって何だよ…」

「ああ…何、一つの言い伝えだよ、練糸君。

昔からな竜族はある程度の年齢になり人間の姿になる際に親竜の鱗や爪、牙や角などを加工して武器にしてその子供に渡すと言う伝承が存在するのだよ」

「へえ…てことはかなりヤバい事やっちゃってしまっただけだな、俺達」

「そうなるな」

二人が予想した通りに少女は怒りに任せて近くに有る物を手当たり次第に殴ったり蹴ったりしている。

しかしその威力は常人のソレとは全くと言っていいほどの差が出ていたりする。

少女の一撃目の拳は校舎の壁を破壊し、二撃目の蹴りにより近くに有った自動販売機が真っ二つに破壊されたので有る。

「おいおい…さすがにあんなの喰らったら死ぬだろ…」

「確かにな。」

運が良くて破裂、最悪細切れになるだろうな…」

「シヤレになってないからな…っ！！」

相手の攻撃を交わしながら会話をしていた二人だが、さすがに避けるのに疲れてきたのか攻撃に打って出ることにした。

「しゃあない…ちょっとぐらい怪我しても仕方ないだろ！！」

克心流：『裂波』（こくしんりゅう れっぱ）」

（説明しよう。）

克心流 裂波とは、自らの体内に存在するオーラの80%を剣に集中させ、それをそのまま強烈な斬撃として放つ荒技である。

ちなみに、全体のオーラの80%とは個人差があり、特に害無く動ける物もいればその後二度と能力自体が使えなくなってしまう場合も有る。）

裂波を放ったと同時に爆発音と共に土煙が二人が戦っていたその場所を支配し、一真と少女は全くと言って良いほど見えない。

「殺った…と言って良いのだろうか？
だが…」

「いや、死んでは居ないはずだ。」

まあ、腕の一本ぐらいいは逝ったかもしれんがな…」

「おお、練条君。
彼女はどうなった…ん…だ？」

土煙から一真の声がしたのでそちらを振り向きながら話しかけていた高坂だがその言葉は途中で止まった。

「うん？」

どうした？

高坂、俺の顔に何か付いてたか？」

「…そうだな、目と鼻と口が付いてるな」

「お決まりのギャグだな…うん？」

なあ、高坂よ」

高坂と話している内に一真は有る疑問を抱いたので聞いてみる事にした。

「変な事を聞くようで悪いが…いつもの俺と比べてどこか違うところは無いか？」

「…全てだ、君は本当に練条 一真君なのかね？」

そう、一真の外見は今、銀色の髪を肩まで伸ばし、失明した左目には眼帯をしている。

そこまでは以前の彼と変わりはない、しかし、ここから先が問題なのである。

一真の元の身長は175cmだったが、現在の身長は145cmまで縮んでしまっているのである。

その事に薄々感じていた一真は小さくため息を吐きながら刀を

鞘に収めてその場に座り込んでしまったのである。

「まあ何だ、驚くなどは言わない。

こちらとしても隠すつもりは無かったが…って聞いているのか？

高坂よ…」

「…ああ…そんなことより一真君、今日この時より一真少年と呼んで良いか？

後、今からデートをしよう。

ちなみに拒否権は無いぞ」

その異常なまでの目の輝きようといつの間にか一真の両手首には手錠が嵌められている状態に焦りを感じていた。

「ちょ…まつ…今の話しはおかしくないか？

てか今どっから手錠を出した？

つかむしろなぜ捕縛されてんの俺!？」

「はっはっはっ…乙女には色々と秘密が有るものだよ…さて、行くでしょうが」

「ま、待ってて。

敵を完全に倒したかどうかを確認しないとだな…」

「そんな事は些細な事でしかない。

大事なのは今をどう生きるかだよ、一真少年」

などと言いながら一真を担いでその場を去ろうとする高坂、その魔の手から逃れようと動き回る一真。

しかし、その力の差は意外にも大きかったらしく、いくら一真が

強いと言ってもそれは能力発動時の話であり、それも元の体型と言
う条件化に置いての事であるため現在は能力も発動していない上に
元ほどの筋力が無くなった為、今の一真の力は小さな子供とさほど
変わりなかつたりするのである。

その事を思い出した一真はさらに落ち込み気味になり抵抗するこ
とを諦めた彼を見て小さく笑う高坂で有った。

そしてこのまま逃げ切るつもりだった高坂だが、彼女が進もうと
した道に大量のナイフが飛んできたのである。

(…新手か?)

などと考えながら一真を近くに下ろし、腰に差して小太刀を抜い
て臨戦態勢に入る高坂、だがその目の前に現れたのは有る意味最強
の敵が出て来たのである。

「…高坂さん、私の一真さんに何してくれてるんですか？
クラスメイト兼仲間だとしても殺しますよ？」

「ふっ…良いだろう。」

君とは一度戦ってみたかったのだよ、景品は一真少年で構わんな？」

「一真さんは景品では有りませんか!？」

お互いの意見の違いにより今、二人の少女の戦いが始まったので
有る。

その戦いが始まった頃、戦場から離れた場所にいた一真は小さく
ため息を吐いた後、先ほどまで戦っていた少女の事を考えていた。

(はあ…いつもは大人しい美夜がね…)

それより問題はあの少女だな。

俺や高坂が本気で戦ってるのに彼女は手加減をしていた…だとしたならとんでも無い化け物を飼ってるな。
シヤドウナイツ共は…)

「あら一真君、こんな所で何やってるの？」

「ああ、佳葵か…てか、俺の状態を見て何とも思わんのか？」

「あら、何に対して驚けと言うの？」

貴方が小さくなった事？

それとも彼女達の争いを見てかな？」

心なしか楽しそうに小さく笑いながら一真に話しかけてきたのは他でもない佳葵だった。

しかしいつもの彼女と違いどこか雰囲気が違う…と感じた一真はその事について聞いてみることにした。

「なあ佳葵…お前何か何時もと違う感じがするんだが…何か隠してないか？」

「ふふっ…気づいたんだね。」

流石は一真君だね…そう、私は相沢 佳葵であってそうではない者だよ

「…多重人格と言うやつか？」

一真の一言に小さく首を横に振る佳葵、しかし、それ以外に思い当たる節の無い一真は頭を悩ませて居るとふと彼の制服の内側の携帯が鳴り響く。

それを取り出し電話を受ける一真。

「もしもし?」

「一真か?」

「隆司か?」

何時もの携帯ではなく学校の回線…しかも、夜明けまであと三十分ぐらいと言つときに…」

「すまん、非常識極まりないのは分かっている。

だがお前にはすぐに所属しているサークルに出てもらわなければならなくなった」

隆司のサークルに出ると言う一言に真剣な顔つきに変わる一真。

それと同時に自分の手に持っている正宗を見やった後、意を決したように立ち上がった。

「…了解、大至急軍事サークルに出頭する。

隆司、悪いが俺の携帯を拡張スピーカーに繋げて学園都市全域に放送が伝わるようにしてくれ」

「分かった。

すまんが一旦通話を終了する、準備が整ったら連絡するから待っている」

「…了解」

そこで一旦通話を終了したのと同時に自分の服装を確認していく一真。

理由としてはこれから向かう場所ではだらしのない恰好では示しが付

かないのと、動きづらいと怪我などをし易い為で有る。

そして問題だと判断したズボンの裾を何の躊躇もなく潜ませていたナイフで綺麗に切りそろえた後、学園指定のブレザーを脱いで佳葵に渡してカッターシャツの垂れている腕部分を腕捲りをしながら校門の方へと歩き出す。

ちなみに彼は今、脇の下にホルスターに収まった一丁のリボルバーと腰に差した小太刀、それと手に持った正宗と言う装備で歩き回るうとしているので有る。

ソレを見ていた佳葵は急いで彼を止めようとした。

「ちよつと待つて一真君。

貴方今から戦いに行くんでしょ？

ならもつとこつ：装備を整えてから…」

「…佳葵よ、俺達傭兵はな、ゴツい武装は要らないんだ。自分が最も信頼できる武器あしほうが有れば切り抜けられるんだよ」

そう言つて一旦話を切り上げて腰に差している小太刀とリボルバーを取り出してその二つの説明を始める一真。

「この二つはな…両親の形見なんだ」

「ご両親の？」

「ああ…このリボルバーはな、俺の母親…鬼姫とまで歌われた人物が愛用していた四十四口径マグナム、使用弾頭は空間圧縮弾。名を『シルバーウルフ』と言う。

次にこの小太刀だが、こつちは父の形見でな、ただの小太刀じゃないんだよ。

オーラにより長さ・強度・切れ味が変わる変幻自在の妖刀『不知火』

(しらぬい)だ」

そう言いながらどこか懐かしそうに、それでいて失った物の大きさを噛みしめたような表示しながら小太刀とリボルバーを最初に納めていた場所に戻して再び校門に向かって歩き出す一真。

しかし、その途中で一真の携帯が鳴っていることに気づきそれに出た。

「もしもし？」

「一真か？」

待たせたな、学園都市全域に広がるようにした。

さあ全権は任せませ、生徒会副会長にして軍事サークル部長の戦友(一真)よ

「了解だ、生徒会会長の親友(隆司)よ」

「我らの望みはただ一つ、『永久の平穏』それを犯しし者には死と言う形で償いを…互いに武運を…」

二人は昔からやって来た勝利への祝詞(一真達が独自に考案した物)を互いに一字一句間違えずに唱え上げお互いの武運を祈った後、一真による演説が開始されたので有る。

「え〜テストス…さて諸君お早う。

こんな朝早くから叩き起こすような真似をして本当にすまない。

さて諸君は俺の事を知って居るとは思うが一応自己紹介しておこう。

俺の名前は練条 一真、この学園都市における最高機関『神城学園生徒会』(かみしろがくえんせいとかい)副会長であり、この学園都市における攻防の要で有る軍事サークル部長も兼任してる者だ。

そんな俺が今、放送で話しているのには他でもない、敵襲だ」

一真がその一言を聞いた瞬間、少なからず起きていた生徒がどよめきを起こしている者、あるいはその逆に自らの武器を調整し出す者がいた。

その反応を察知した一真は彼ら対してさらに演説を続ける。

「…先程も言ったとおり、ここから先は戦争になる。

一般生徒の諸君、本日からしばらくの間学業を休止して避難してもらう、場所は二カ所。

まずは神城学園、そして次に中央体育館。

どちらか近い方で構わないから速やかに避難する事、以上だ、次に軍事並びに諜報、そして神城学園生徒会執行部並びに各委員会の委員長に告ぐ。

まず神城学園生徒会執行部並びに各委員会の委員長は大至急会長の指示を仰ぎ迅速な対応を期待している。

最後に軍事及び諜報の諸君、三十分以内に第一基地に集合だ、一秒でも遅れた場合男子はシベリアのガチムチホモ陸軍教官の所に…女子は学園都市全土の公衆トイレのトイレ掃除を一ヶ月程やつてもらおう。

一人でも遅れたら…連帯責任な？」

そう言い終えると同時に携帯を切る一真、ちなみに一真が放送を終えてから一分後、軍事及び諜報サークルのメンバーは死ぬ気で全員が第一基地に向かったとか…

その様子を監視モニターで確認していた一真は小さく笑みを浮かべながら今度こそ校門の方へと歩き出す、その右腕には軍服の上着が持たれており、歩きながら羽織って居る。

しかしいかんせん身長が縮んだ影響がこんなところまでと思いなから服の腕を捲り上げながら小さく溜め息を吐きながら第一基地へと歩いていったので有った。

それから数分後、学園都市の外れに存在する第一基地、そこは普段軍事及び諜報サークルの人間が切磋琢磨し、時に笑い泣きど突き合う、そう言う場所で有るが…どうやら今はそんな事をやっている暇も無い。

なぜなら我らが部長の伝達もさることながら、今日の前に居る少女とその彼女の乗っている物が少しばかり異常なので有る。

(おい…アレって)

(ええ…アレって旧式のバイクって呼ばれる乗り物よね…)

部員達がざわめきを起こしている間に部長である一真が到着した。しかし何やら騒々しい事になっており、まずはその騒動を沈静化しなければ今後の士気に関わると考えた一真は近くに居た部員に事情を聞く事にした。

「あゝそこの君、ちょっと良いかね？」

「はっ何でありますか!？」

一真部…長…っ!?!？」

一真が話しかけた青年は悲鳴に近いを上げようとした瞬間、彼の口を右手で塞ぎ、左手で素早くシルバールフを構えて彼を脅迫する。

「大声を上げるな、騒ぐな。」

そして的確に状況を説明しろ」

「はっ…先程全部員が集合したのを見計らったかのように少女がバイク見たいなものに乗ってこの第一基地へと侵入してきたので有

ります。
はい」

「分かった。
後、バイクの様なものではなくバイクだ」

会話を終了した一真はすぐさま跳躍し、空間を圧縮すると共にそれを階段を作り、登り上げた位置にまた空間を圧縮した足場を作り、そこで止まる。
そしてそこからある作業を開始した。

「さて…久々に武器錬成をやってみるか。
が、その前にこの体のスペックを計っておかなければ…」

そう言いながら体内の情報をかき集めていく、そしてある程度の情報収集を終えた一真は小さく溜め息を吐きながら右手に持っていた正宗を空間の狭間に突っ込んだと思いきやその手には彼がいつも持ち歩いていた小太刀を取り出して腰に差す。

それを終わらせた一真は自分の身体能力に付いて考え始めた、

（能力の極限使用による代償…まずは身体能力。

筋力的には元の二分の二程度の、身長及び体重は…まあ影響は特に無いか…女子が騒ぎ立てそうだが。

意外な副産物は脚力と身軽さが向上したお陰で今まで使えなかったこくしんえんぶりゅう克心燕舞流を使う事が出来そうだな）

自分の置かれている状態を楽しんでいる様にも見えるが実はそうでもなかったりする。

一真達の使う克心流は全部で二十七の異なる武器を使い、それに合わせた技術・技・体捌きなどを極めた人物が集まり一つの流派とし

て消化されたのが克心流と言われている。

ちなみに、初代克心流総集技術伝承者（こくしんりゆうそうしゅうぎじゅつでんしょうしゃ）以来、二十七全ての克心流を使える物はおらず、書や口頭などで受け継がれて来たのであるが、練条家七十六代目当主で有り、二十八代目克心流総集技術伝承者で有る一真は幼い頃より世界、あるいは国内を飛び回って家に年何日間しか居なかつた両親の変わりに一真とその妹を育てたのは、一真の家で執事を勤めていた霧島 翔：つまり一真が指示する彼は元は彼の家で働いていたのである。

彼の元で育てられていた一真はある日、暇を持って余したようでは翔が秘書室に有る本棚を漁っているときに偶々見つけた古文書に興味を持ち、解読を始めたのが始まりだった。

（あの時はこの克心燕舞流は使えなかつたし、何より使うつもりも無かつたからな…と物思いにふけってる場合じゃないな…）

そう言いながらシルバーウルフに空間を圧縮した弾頭を装填していく一真、そんな事していると一真の後ろに有る人物が現れた。

「よつと…おう一真、首尾はどうだ？」

「匡正か…まあまあだな、まだ敵を目視出来ないからそう近くまで来てないんだろうな」

「なるほど…ってかのんびりこんな所でくつろいでて良いのかねえ？」

「くつろいでる訳じゃねえよ。」

弾を精製しとかないと…ここから先は戦場だからな」

そう言いながらシルバーウルフのシリンダー六個に弾を装填し終えたらしく立ち上がり銃をホルスターに納めた一真は立ち上がり大きく息を吸った後、地上に居る部員に喝を入れた。

「黙らんか!!」

今すぐ黙らない奴は先程の宣言通りシベリアに送りつけるからな!!」

一真の一言で静けさを取り戻す第一基地、と言うよりも凍り付いたと言つのが正しいかも知れない。

それはさておき、一真が部員全員を喝を入れている間に周囲を見ていた匡正は有る異変に気が付いた、それは普段起こるはずが無い砂塵が巻き起きていた、

「来たようだな…」

一真

「匡正、奴らが来たのか？」

「ああ…」

匡正が声を掛け、目線を合わせただけで状況を判断出来る一真が凄いのか、はたまた、アイコンタクトだけで全てを伝えられる匡正が凄いのか…

ともかく二人の雰囲気急に険しくなったのを感じ取った部員達にも緊張感が伝わったらしく、それまでの騒ぎが嘘のように真剣な表示で一真の指示を待っている。

それを見た一真は的確な指示を部員達に飛ばす、

「諸君!!」

気付いて居ると思うのだが、奴らが来た。

第一から第三部隊は地上で迎え撃て。

続き第四から第六部隊は空中で迎え撃つ、第一から第三者部隊は匡正と諜報サークル副部長が仕切る、きちんと指示に従うように。

次に第四から第六部隊は俺と軍事サークル副部長が指示する。

以上だ異論はないな、諸君！！」

『イエス・マム』

そう返事をした部員達はすぐさま行動を開始する。

その様子を見ながら小さく苦笑しながら腰に差した小太刀…不知火と白銀を一度手にとり、再び鞘に納めた一真の表示は苦笑からいつもの真剣な表情へと戻っていた。

「さて…戦争を始めようか？」

そう小さく呟いた一真は空間圧縮した場所から降り、軍議室の有る方へと歩いて行くので有った。

第10話 完

第十話 戦いの幕開け 〳その1〳 練糸 一真の権力(後書き)

いかがでしたか？

そろそろストックが…

ではまた

第十一話 戦いの幕開け くそのく 奇人変人名物副部長ZU（前書き）

どうも、現実が忙しくては中々投稿が出来ませんでした、すみませ
ん、

ではどうぞ

第十一話 戦いの幕開け くそのく 奇人変人名物副部長ZU

招集を受けた軍事及び諜報サークルの部員達が準備をしている間、
一真達部長・副部長は軍議室に居た。

「さて…軍議を始めようじゃないか。
つとその前に…副部長、いい加減俺から離れなさい」

「え〜いやですよ。」

部長可愛いし、小さいし、暖かいし、抱き心地なんてもう…」

「もう良い…好きにしゃがれ、ただ美夜だけには見つからん方が
良いぞ。」

血の雨を見る羽目になるぞ」

「大丈夫ですよ、いざとなればテレポートを使って逃げますから」

などと言いながら笑うウェーブの掛かった金色の髪を腰まで延ばした、サファイア色の瞳をした副部長と呼ばれた女性、彼女の能力は一真の空間を操作する能力に近いテレポート能力を所有している
ので有る。

ちなみにテレポートとは、空間と空間の間にラインを引き、その
点と点を一瞬にして移動する能力で有る。

しかし、この能力には弱点がある、その一つとして座標設定の際の
演算…これは、そこに行く際に必要な時間・位置・方角・場所・時
差・その地の環境・その場所まで距離・気候・湿度・気圧などなど
を即座に演算・情報処理を一瞬で行わなければならない為、一つで
も間違えれば地底の底、また、深海の中、はたまた宇宙に飛び出し

た場合は即死… っでどこに出たとしても死ぬ事になるのには変わり無いので有る。

それはさておき… 彼女の能力について誰よりも詳しい一真だからこそそんなへまはする事は無いと、軍事サークルに入った時から彼の右腕として働き続けて居る彼女に対して絶対的とまでは行かないがそれに近い信頼を持って居る一真だからこそ彼女がその様なミスはしないと分かってるの。

しかしそれと同時に何時か彼女が失敗を犯した時の反動を恐れて居た。

(… 彼女はいつか失敗を犯す、その時彼女はどくなってしまう?)

「どうしました？」

部長

「… いや何でもねえ」

一真はそう言いながら手元に有ったコーヒーを一口飲みながら目を反らす。

それを見た副部長… 本名アリア・フォン・ローゼンクランツが小さく笑み浮かべながら一真の頭をなで出す、

「気にしないでください、一真部長。

部長が考えてる事は杞憂です」

「そうだと良いな…」

半ば諦め気味に溜め息を吐きながら残って居たコーヒーを飲み干す一真、それを見計らったかかの様に向かい側にある席に座って居たグレーの髪を短く纏めるでも無く整える訳でも無いボサボサの頭

をした中肉中背の青年が心底おかしそうに笑いながら一真に話しかけて来た。

「カツカツカ…相変わらず修羅場を作るのが得意だな、レンは」

「フッフッフ…相変わらず良い度胸してるな、リンよ…」

不気味な笑いを浮かべながら不知火を青年の心臓近くに向けられ今にも突き刺さりそうな距離を保って居る。

しかし、リンと呼ばれた青年は少しも動かずに居る。

それどころか、顔色一つ変えずに一真の様子を伺って楽しそうに笑って居るので有る。

ちなみに、青年の本名は黄・慶林、ファン・クイン格林友人からは親しみを込めてリンとかコウとかファンとか呼ばれている。

それは良いとして…それを見て忌々しそうにリンを睨み付ける一真、そして吐き捨てる様に呟いた。

「チツ…不可視の楯かよ…」

「カツカツカ、そう簡単に殺られてたまつかよ!!」

「へえ…ならこれならどうだ？」

そう言いながら左手に空間の法則・次元の法則・異空間の法則・亜空間論理・全空間を統括する権限、その他諸々の法則・論理を圧縮し一振りの野太刀を形成しリンの作り出した不可視の楯を簡単に両断した。

「さて…次はリン、貴様の番だ…!!」

「…やば、忘れてたわ。」

カズが学園都市最強だって事…

だが…負ける訳には行かねえ!!」

叫びながら不可視の力（不可視の力とは、人間の目に見る事の出
来ない細かい粒子を集めたり、プリズムの様にしたりする事である）
を使い剣を形成し、一真の野太刀に立ち向かう。

しかし、一真の持つ野太刀：名を断空刀と言う、この太刀の特製は
全ての物質の空間質量を切り裂く事を可能として居る。

それに対してリンの不可視の剣：ファントムブレイドは、全ての物
を切り裂く刃を持ち、その上刃には対象物の持つ固有振動数と同じ
振動数を起し、共振させて破壊する事を可能としている。

そんな絶大な破壊力を秘めた二人の武器がぶつかり有った際に発
生する余波はすさまじい物で、会議をして居た軍議室と言うなのテ
ントを吹き飛ばして戦い始める二人、やがて二人は荒野に飛び出し
更に激しさを増して行き、ついには小規模な時空の歪みすら発生し
ていた。

そして更に剣線重ねようとした二人に向かって数十発の小型のパ
トリオット弾が飛んで来る。

「リン!!」

「分かってるよ、レン!？」

…発動、ファントム・オブ・イージス!!（万能にして不可視の楯）

「

走りながら不可視の楯を転回し、小型のパトリオット弾を防ぐ。

しかし、普段ならその程度の攻撃では傷一つ付ける事など出来も

しないのだが、今回の攻撃は少し違って居たのである。

確かに一発目のパトリオット弾は難なく防ぐ事が出来た、だが、二発目以降の攻撃が続くに連れ不可視の楯：ファントム・オブ・イージスに凄い勢いで亀裂が入って行き、五発目で遂に亀裂部分から破壊され真つ二つに割れてしまい、六発目以降のパトリオット弾がリンに迫って来て居る。

しかし、不可視の楯を破壊されたショックが余りにも大きかったのか、数秒間その動きを止めてしまう。

「おいリン、気をしっかり持て!？」

「…ッ!！」

一真の叫びに流石に意識を取り戻したリンは直ぐさまファントム・オブ・イージスを再構成し始める。

しかし迫って来るパトリオット弾を完全に防ぎきる事は出来る訳が無く、数発のパトリオット弾がリンに迫って来る。

だが、リンはどこか諦めた様に不可視の楯を構築すると言つ行動事態を止めてしまったのである。

「…っ!？」

馬鹿…野郎ッ!！」

叫びながら走り出した一真、しかし、普段の走る速さは今までの倍速で有る事に驚きながらもその速さに今は感謝しながらリンの元へと駆けつける。

そして到着すると同時にリンをパトリオット弾の被害に会わない位置まで蹴り飛ばして後、自身の空間操作能力を利用して空間圧縮で楯を構築し、それを利用してパトリオット弾を次々と受けていると言つのに一向に減る気配を見せないパトリオット弾に嫌気を指し

ながらも防ぎ続ける一真。

しかし、突如腹部に痛烈な痛みを感じたため、発動していた空間圧縮の楯が薄くなり、パトリオット弾により砕かれてしまった。

(…ッ!!)

しまった、今日があの日だと言うことを忘れていた、しかし…やるしかない!!)

心の中で叫びながら不知火を抜いてパトリオット弾を切り裂く一真。

しかし、やはり手数には勝てないらしく、段々と切り落とせる数が減り、周りに着弾するしている。

そしてその事により小規模なクレーターに足を捕られてぐらつき倒れそうになる一真、それに追い打ちを掛ける様にパトリオット弾が襲いかかって来たので不知火で受け止めようと試みたが、爆風と直撃により不知火は真っ二つに折れてしまった。

「なっ…!!」

不知火が折れた…だとっ!!!?」

自分の父の形見である不知火が折れてしまいショックを隠しきれずに地面にへたり込んでしまった一真。

それを遠く（蹴り飛ばされたので腹痛に耐えながら）の方で見ていたリンがファントム オブ イージスを展開しながら一真の元へと走る。

だが、いくらリンの足が速いと言ってもやはりパトリオット弾の速度に追いつける訳もなく、到着まで後百メートルと言ったところで一真にパトリオット弾が直撃したのであった。

それを目の当たりにしたリンはその場に座り込んでしまった。

（そんな…守るって誓ったのに！！？

一族の掟とか忠誠なんてクソ喰らえだ…

俺の妹がモンスターやメタルソルジャー（機械兵）に蹂躪されそうになった妹を助けて貰った恩義…それに報いる為に強くなるって決めたのに…）

後悔の念からか無意味に地面に拳を殴りつけるリン、その拳から止めど無く血が流れ出て居る。

そんな彼を土煙の向こうから、ボロボロになった一真を抱き抱えながら、哀れむような、しかし、決して同情などしてやるものかと言わんばかりに彼を睨みつけるアリアの姿がそこに有った。

「貴方には失望しました、黄・慶林。」
ファン・クインケリン

貴方に任せて置けばある程度の事なら一真様を守りきるだろうと信頼していたのですが…どうやら間違いだったようですね」

「なん…だとっ？」

「…貴方の腕は確かです。」

だから、一真様を任しても大丈夫と信用して居たのですが…どうやら私の思い違いだったようですね」

そう言いながら向きを変えて歩き出すアリア、それを止めようと手を伸ばすリン。

しかし、その伸した腕は一瞬にしてその場から消え去った。

「…あっ？」

「どうしたん…で…すかっ！？」

リンは自らの腕が吹き飛んだ事に気付いていない様子で有り、アリアは即座に数本のナイフをコートの下から取り出して臨戦態勢に入り何時でも戦える様に構えてその構えを解く気配すら感じさせない。

(一体どこから砲撃を…それよりも安全な場所へ!)

即座に考えを巡らせて行動に移したアリア、まず一真をお姫様抱っこしたままリンに近づく。

そして三人が集まって瞬間、アリア達三人はその場から姿を消したので有った。

第十一話 完

第十一話 戦いの幕開け くそのく 奇人変人名物副部長ZU（後書き）

如何でしたか？

ストックが無くなったのでしばらくは遅い更新になると思いますが
…堪忍してください。

ではまた

第十二話 戦いの幕開け くそのく 行った先は隣街（前書き）

今回は短いですが、どうぞ

第十二話 戦いの幕開け くそのく 行った先は隣街

それから数秒後、軍議室の立って居た場所に部員が集まり初めて居た。

理由は、部長及び副部長がその場に居なかった事と、軍事サークルの副部長が突如として能力を使って離れた事に少なからず動揺を誘ってしまった様で有る、

しかし、その場に集合し始めたのはあまりよろしく無かったりする、その理由は…

「おい、部長と副部長が居なくなっただって…本当か？」

「ああ、あの普段冷静な副部長が能力まで使って部長とファン副部長を追いかけたらしいぜ」

「マジかよ…あの部長以外にはなびかない事で有名な副部長がか？」

「いや、今の話だと部長も居ただろ」

などとくだらない話を続ける部員達、そして話は更にエスカレートして行く。

「てかあの部長の身長は無いよな」

「何言ってるのよ。」

確かに前の部長の方が格好良かったけど今の部長は可愛いじゃない」

等々と至らない話で盛り上がり始めた部員達、そんな部員の後ろ側からバイクに乗って居た少女が降りて被って居たヘルメットを取り、まとまって居たショートヘアを頭を振る事により自然な感じになる。

しかし、その少女は今の一真の姿に良く似て居るが、少し違う…正確には、髪の色は覚醒後の色…つまりコバルトブルーで有る、後は眼帯を付けて居ない事だろう…

それは良いとして、そんな彼等・彼女等を見て心底呆れた様な顔をしなが隣りに立って居るメイド服の女性に目を向ける。

すると彼女が何を求めて居る事を理解して居るのか、黒い唾の付いたハットに似た羽の付いた帽子を手渡す。

それを受け取り被った後、深々と溜め息を吐いた。

「はあ…こんな馬鹿で愚かで屑みたいな一同が兄上の部下だなんて…不便過ぎるわ…」

「同感です。」

ですが…中々優秀な人材も混ざって居る様ですね、性格には少し難が有りそうですが…」

「アリシアもそう思う？」

そこだけは認められるわね。

不思議よねえ…優秀な人材って何でこう…おかしいのかしら？」

二人はほぼ同時に首を傾げながら辺りを見回して居ると、突如空間がぶれてその場に一真とアリア、片腕を無くしたリンが現れたので有った。

同時刻、一真とリンを連れだアリアは途方に暮れていた、

(失敗しました…まさか隣りの学園都市に転送してしまうとは…)
そう、彼女達…正確にはアリアの演算ミスにより一つ先の学園都市に転送してしまったので有る。

しかし、幸いな事に出て来た場所が路地裏だったので目撃者は皆無…だが演算ミスにより力を殺し切れなかったらしくその衝撃波に絶え切れなかった様で周囲に有ったビルが全て割れてしまい多少は音がしたが誰にも見つからなかった様だ。

(少し被害が出ましたが…まあこの程度なら問題無いでしょう…)
などと考えて居ると気絶して居た一真が目を覚ました。

しかし、その様子はいつもと若干違う事に気付いたアリアが一真を気にかけていた。

「あの…部長？
大丈夫ですか？」

「…れた…」

「え…？」

「…折れた、最高の硬度と伸縮自在…何より父さんの形見が…！
？」

今まで溜め込んで居た感情が一気に決壊した様に大声と大粒の涙を流しながらその場に座り込んでしまった一真をあやすアリアで有った。

それから数分後、泣きやんだ一真を抱き抱えたまま動こうとしないアリア、流石に恥ずかしくなって来たのか、顔を赤くして彼女か

ら離れようとする一真、

「…アリアよ、もう良いから離してくれ、流石に恥かしいから…」

「嫌です、と言うか…私が離したくないんです」

「しかしだな…」

渋るアリアを何とかして引きはがそうとする一真。

しかしアリアもそれなりに抵抗するため、体の小さい一真は成すがまま、されるがままと言った感じになって居る。

そしてその光景を見て大爆笑しながら起き上がった、その青年は言わずとリンで有る。

「カツカツカ、諦めるや、レン。

おゝ痛た…」

「…リン【ファン・クイングリン】…!!」

てかお前【貴方】は機械の体だから痛点無いだろ【無いでしょう】」

「

「…おお、すっかり忘れてた、肉親は生身の人間だったからな」

高笑いしながら立ち上がりコートを羽織り歩き出すリン、その後を追う一真とアリア、その次の瞬間には彼ら姿は路地裏から消えて居た。

この先彼らに待ち受けて居る者とは…

第十二話 戦いの幕開け くそのく 行った先は隣街（後書き）

いかがでしたか？

また早めに更新します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5281y/>

満月の消えた世界

2012年1月2日10時45分発行